

---

## 令和4年度共通教育 活動報告書

P

### I 「共通教育実施委員会」活動の総括

1

---

### II カリキュラム等編成部会

4

---

### III 自己点検・自己評価部会

5

---

### IV FD部会

7

---

### V 広報部会

8

---

### VI 分科会報告

1	大学基礎論分科会	10
2	課題探求実践セミナー分科会	13
3	学問基礎論分科会	17
4	人文分野分科会	33
5	社会分野分科会	39
6	自然分野分科会	40
7	医療・スポーツ科学分科会	43
8	外国語分科会	47
9	キャリア形成支援科目分科会	62
10	日本語・日本事情分科会	63

---

## I 令和4年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2023年3月28日

共通教育実施委員会

### 1. 共通教育実施委員会および常任会議

本年度も、新型コロナウイルスの影響により、当初予定していた計画が実施できない部会もあった。しかしオンラインによる授業実施やアンケートなども徐々に定着し、より効率的・効果的な実施が行えるようになった側面もある。

本年度は、以下の3項目を重点事項とした。

- 令和6年度からの共通教育担当新体制の検討
- 共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取組
- 次年度(令和5年度)本学が当番校となる国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会の準備

それぞれの重点事項に関する成果は以下の通りである。

令和6年度からの共通教育担当体制の検討に関しては、「共通教育再編検討会」を立ち上げ、前年度決定された領域ごとに、具体的な科目数の策定を行った。授業効果を落とさずに効率的、かつ学修者本位の科目の設定を行い、データサイエンスや文理融合など新たに求められている科目を立ち上げる計画を立てた。次年度は、カリキュラム等編成部会により、決定された科目の実施体制の構築を行っていく。

共通教育における共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取り組みについては、シラバスチェックが2年目となり、自己点検評価部会によって体制が整備され、シラバスにおける授業内容や評価基準をよりわかりやすく、明確に、学生に提示できるようになった。

国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会については、オンラインでの実施が決まり、具体的なプログラムの策定を行った。

### 2. 部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD 部会」、「広報部会」の4部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する(詳細は各部会の報告を参照)。

カリキュラム等編成部会では、次年度に向けたカリキュラム編成は、3回の部会開催を通じて、順調に進め、共通教育担当体制に係る基本方針に沿った授業題目表を作成することができた。

自己点検・自己評価部会では、成績評価分布や授業振り返りアンケートの実施促進を行っ

た。また、シラバスに関し、2回の部会開催により、各分科会でチェックを行うシステムを構築した。

FD部会では、共通教育においてFD・SDウィークに8件の授業参観を行い、それ以外にも独自に授業参観を行うなど、活発なFD活動が行われた。

広報部会では、『パイプライン』第60号・第61号を発行した。電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、調査を行った。さらに、共通教育再編に伴う『パイプライン』のあり方の見直しについても、議論を行った。

### 3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである(詳細については各分科会の報告を参照)。

(1) カリキュラム編成の取り組みについては、分科会ごとの個別の報告に譲るが、どの分科会も問題なく編成することができた。

(2) 各分科会の取組は、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、各学部で、担当教員間での話し合いや情報交換、授業アンケートの分析、FDが行われた。また、受講生によるwebアンケートを行った。

学問基礎論分科会では、各学部においてアンケート調査が活発に行われ、オンラインでの授業実施を含めたさまざまな分析が行われた。

課題探求実践セミナー分科会では、部会長や授業担当者のFDセミナーへの参加が活発に行われた。また、授業改善アンケートを行い、その結果について共起ネットワークを用いた詳細な検討が行われた。

人文分野分科会では、成績分布の検討結果についての詳細な分析を行った。また2月15日に、外部講師を招いてのFDを行い、教育の向上につなげる活動を行った。

社会分野分科会では、コロナ禍によりFDやアンケート等は行えなかったが、物部開講授業のオンライン実施などの検討を行った。

自然分野分科会では、内部質保証体制の実施方法について、委員内で議論を行い、またシラバスチェックを実施した。さらに、R5年度から開始される新カリキュラムについて検討を行った。

スポーツ・健康分科会では、授業評価アンケートを実施し、受講生の適切な人数に関して分析した。また、第68回中国四国地区大学教育研究会の分科会の運営を行い、活発な意見交換を行った。

生命医療分野では、1学期の「健康」について、受講生のアンケートを行い、詳細な分析を行った。また分科会会長が授業参観でのピアレビューを行い、意見交換を行った。

外国語分科会は、教員の減少により開講科目の維持が困難であるため、オンラインを利用した学修を進めることなどについて、検討を行った。また、本年度初めて授業評価アンケートを行い、多くの好意的な回答を得、今後の授業改善に活かすこととなった。

キャリア形成支援分科会では、全学のキャリア形成に関する動向を把握することに務め、またシラバスチェックを行った。

日本語・日本事情分科会では、「日本語」の受講生が減少していること、またコロナ禍により留学生が減っていることを踏まえ、より効果的な科目の開講ができるよう、検討を行った。また独自に授業アンケートを行い、さらに授業において留学生と日本人学生との小グループでのピアラーニング活動を行うなど、文部科学省が掲げる課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的とした授業の開発や実施を行った。

#### 4. その他

- (1) 『令和4年度共通教育実施委員会活動報告書』は、4月中に発刊し、WEB上で公開する。
- (2) 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

## Ⅱ カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 川本真浩(人文社会科学部)

### 1. カリキュラム等編成活動の経過

2022 年7月 6 日 第1回カリキュラム等編成部会(オンライン)

共通教育授業担当体制の決定方法について説明を行った後、令和5年度共通教育に係る担当体制を提案し、各学部に提示することが了承された。

2022 年 10 月 14 日 第2回カリキュラム等編成部会(オンライン)

前回の部会です承された担当体制案について、各学部からの変更希望をうけて調整が行われ、令和5年度共通教育授業担当体制が了承された。そして、この担当体制が後日開催される共通教育実施委員会において確定された際には令和5年度共通教育授業題目表の作成を各分科会長に依頼することが了承された。また機構・センター等所属教員に対して、令和5年度共通教育授業担当への協力を依頼することが報告された。

2023 年1月 13 日 第3回カリキュラム等編成部会(オンライン)

令和5年度の共通教育授業題目表を確定させた。また、機構・センター等所属教員による新規開講科目の確認を行った。

### 2. 令和4年度カリキュラム等編成活動の総括

次年度に向けたカリキュラム編成は、全体的にはほぼ順調に進めることができた。編成作業に当たられた各分科会長をはじめ、各学部・機構・センター所属教員、共通教育係など関係者にあらためて謝意を表したい。

いっぽう、現行の共通教育担当体制による授業開講は令和5年度で終わり、令和6年度からは新たな理念と枠組みによる担当体制とカリキュラム編成が始まる予定である。新しい仕組みが、授業担当体制の問題点を改善し、ひいては学生にとってより良い共通教育につながることを心より願うとともに、新制度の円滑な運営・実施のために当部会としても最善を尽くしたいと考える。

### Ⅲ 自己点検・自己評価部会

自己点検・自己評価部会 部会長 杉田 郁代

#### 令和4年度活動の概要

##### 1. 自己点検・自己評価部会の目標

共通教育の授業科目において、シラバスの点検、授業に対する評価とその評価分布の検証を行う。

##### 2. 活動の報告

###### 第1回 共通教育実施委員会 自己点検・自己評価部会の開催(オンライン)

日時:令和5年1月 18 日

内容: 共通教育科目におけるシラバスチェックの点検体制について説明を行った後、本年度の点検方法を提案した。分科会ごとにシラバスの点検方法、「分科会構成員によるピアレビュー」もしくは「自己点検・自己評価委員(又は分科会長を含めた)による点検」を決定し行うことが了承された。

###### 第2回自己点検・自己評価部会の開催(メール会議)

日時:令和5年1月23日

内容: 共通教育シラバスの点検作業について説明文書を送付した。内容は、シラバス点検作業の方法を、全分科会で統一することの審議であった。第1回の部会では、分科会ごと点検方法を決定することとしたが、全分科会の点検方法を「分科会構成員によるピア・レビュー」とすることを提案し、了承された。

##### 3. シラバス点検方法の経過

確認期間:令和5年2月27日(月)～3月8日(水)

確認期間開始にあわせて、学務課全学・共通教育係より、各分科会の自己点検・自己評価委員へシラバスデータの送付が行われた。その後、各分科会内で「分科会構成員によるピア・レビュー」による点検が行われた。この作業により、36授業科目において修正事項が確認された。

修正期間 令和5年3月10日(金)～3月15日(水)

修正期間中に、自己点検部会長より、授業担当者に対して修正依頼を行った。

修正確認期間 令和5年3月16日(木)～3月23日(木)

自己点検・自己評価委員より、修正依頼箇所の最終点検を行った。

その結果、14授業科目において、修正事項が確認され、自己点検部会長より、授業担当者へ連絡し、修正依頼を行った。

公開日 令和5年3月24日(木)

## 2. 令和4年度自己点検・自己評価部会活動の総括

次年度に向けたシラバス点検作業は、全体的に順調に進めることができた。シラバス点検にかかるチェック体制も2年目を迎え、初年度に見られた課題の解決に努めたことよって、各分科会内の点検作業、分科会と部会長との連携、部会長からの修正依頼などの一連の過程を円滑に進めることができた。これは、点検作業に当たっていただいた各分科会長をはじめ、委員の先生方のおかげである。この場を借りてお礼を申し上げる。

一方で、修正事項の内容を確認すると、その多くは授業の到達目標と成績評価の記述が不明瞭もしくは記述不足であった。具体的には、授業の到達目標の記述が学生を主語にして、「〇〇ができる」と記述することができていなかった。今後は、学び創造センターのFD「シラバスチェックセミナー」をシラバス点検の際に紹介し教員自身が自己点検できるように努めていきたいと考える。

## IV FD部会

部会長 波多野 慎悟

今年度もコロナの影響で多くの授業が非同期型オンラインで行われる中、FD・SD ウィークで8件（人文分野2、社会分野1、自然分野1、キャリア形成支援科目4）の授業参観が実施された。また、FD・SD ウィーク以外でも、医療・スポーツ科学分科会で授業参観（スポーツ科学実技：バトミントン）が実施されるなど、各分科会においてFD活動がおこなわれた。



## V 広報部会

部会長 山崎聡

### 1 本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

岡田健一郎（人文社会科学部）、宇田幸司（理工学部）、関安孝（医学部）、齋幸治（農林海洋科学部）、佐藤洋子（地域協働学部）

### 2 本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年2回）、電子化された『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

### 3 本年度部会の活動報告

#### 3-1) 概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第60号を12月に発行、第61号を3月に発行（予定）した。

#### 3-2) 部会議事と関連会議事項

- ・第1回部会（メール会議：令和4年7月25日）：議題『パイプライン』第60号発刊計画および令和4年度活動計画について
- ・パイプライン発行にあたって、60号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。
- ・今年度の活動計画と予算案について諮り、承認された。
- ・特集は、ローテーションにより、分科会「社会」「医療・スポーツ」とした。
- ・第2回部会（メール会議：令和4年12月1日）：議題『パイプライン』第61号発刊計画について
- ・パイプライン発行にあたって、61号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。

#### 3-3) 本年度の審議内容の概要

##### 3-3-1) 『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

- ・例年どおり、『パイプライン』の読まれ方に関して、当該ウェブサイトへのアクセス数の調査を実施した。
- ・今年度も昨年度に引き続いて、発行のアナウンスを、グループウェア、KULAS、Facebook

および学生掲示板を通じて行い、より多くの人々に周知するよう努めた。

### 3-3-2) 『パイプライン』の編集・発行について

- ・第60号を令和4年12月にHPに掲載した。

特集は分科会で、「社会」「医療・スポーツ」であった。

教養の頁は、ローテーションに基づき、人文社会科学部の担当であった。

#### FD 部会報告

共通教育実施機構委員会から

- ・第61号の編集を行った（発行は3月の予定）。

特集は、「初年次科目」であった。初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等

学生記者(各学部から計12名)：原稿400字程度。原稿料1500円(支払書類要)、院生も可。※原稿料は、学生委員会活動に対する謝金という形で支出する。

教員(6名)：各学部1名 原稿800字程度

## 4 次年度（以降）の課題

- ・昨年からの継続課題であるが、共通専門科目が廃止されたことに伴い、特集のローテーション1ターン分抜け落ちたので、変化に乏しく、やや平板となる懸念が生じている。この点を鑑みると、編集方針を再考するべき時期に来ているように思われる。
- ・引き続き、『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容（構成）へと高めていきたい。
- ・広報の手段として、今年度も大学のFacebookが活用された。その分、幾らかでもアクセス数増加を期待したいが、更なる方法についても検討してゆきたい。新入生オリエンテーションの際に何らかのアナウンスができれば良いと思われる。例えば、アドレスを記載したパンフレットを配布するなど。
- ・共通教育のあり方自体も再考する時期に来ており、カリキュラムの編成方法も抜本的な改革が望まれている昨今である。それに伴い、『パイプライン』の編集内容もブラッシュアップしていくべきだと思われる。具体的には、現体制は令和5年度一杯をもって廃止となり、令和6年度以降は新体制に移行する見込みであることから、『パイプライン』の構成も刷新されることとなる。青写真について現段階で描くことは不可能ではあるものの、各方面からの意見を参考により適切かつ柔軟に新編集方針を構想していく予定である。

## VI 分科会報告

### 1 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 森塚直樹（農林海洋科学部）

本科目の授業形式や教員の担当方式等は各学部で決定し、実施しているが、共通する目標は以下の3項目である。

- ① 大学で学ぶことの意義と目的について考え、「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換する。
- ② 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。
- ③ 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これらの3項目について考える作業を講義やグループワークで行うことによって、コミュニケーション能力の向上、議論の進行方法及び合意形成手法の修得を図る。

これらを受けて、大学基礎論の教育目標が達成されるようカリキュラム編成を進めると共に、必要に応じて授業改善に向けた自己点検・評価活動、並びにFD活動を実施した。

#### 1. カリキュラム編成

次年度における各講義の内容について検討を行った。各講義の配置に至った各学部の経緯、担当教育母体の意思等を確認し、ほぼ例年通りのカリキュラム案が了承された。来年度は、対面形式で実施される予定であるが、moodleによる非同期型オンライン形式の講義や授業時間外の活動を想定したMicrosoft teamsを活用した共同作業も取り入れる予定である。

#### 2. 自己点検評価活動

コロナ禍前までは、大学基礎論はグループワーク等の演習が対面形式で実施されていた。しかし、今年度（令和4年度）においては、本学の新型コロナウイルス感染症対策に従い、一部の講義でオンライン講義が実施されることになり、レポートや課題提出状況によって評価される場合もあった。

今年度も昨年度と同様にKULASのWEBアンケートを活用して授業アンケートを実施した（7月26日～8月1日に実施）。授業目標に関する8つの質問に対して、「はい」、「どちらかというとはい」、「どちらともいえない」、「どちらかというとい

え」、「いいえ」の5段階で回答を求めた結果、「はい」という最も肯定的な回答をした回答者の割合を以下の表に示す。

表：大学基礎論の授業目標に対して、「はい」と回答した回答率（%）

コード	1001	1006	1011	1012	1031	1041	1051	1061	1901	1918	平均	変動係数
学部	人文社会科学部	人文社会科学部	人文社会科学部	人文社会科学部	教育学部	理工学部	農林海洋科学部	地域協働学部	医学部医学科	医学部看護学科		
回答者数（受講生に対する割合）	78 (80%)	72 (80%)	30 (67%)	44 (79%)	125 (89%)	202 (71%)	156 (73%)	52 (80%)	97 (87%)	54 (87%)		
Q1：授業を通じ「大学で学ぶことの意義と目的について考える」ことができましたか。	51.3	55.6	36.7	43.2	62.4	64.9	48.7	51.9	66.0	46.3	52.7	18.3
Q3：「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換することの重要性を認識する」ことができましたか。	59.0	55.6	46.7	52.3	51.2	62.9	51.9	46.2	62.9	44.4	53.3	12.5
Q5：「卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識する」ことができましたか。	23.1	47.2	16.7	20.5	69.6	38.1	25.0	36.5	69.1	55.6	40.1	48.9
Q7：「卒業時にどのような能力をつけておくべきか考える」ことができましたか。	43.6	61.1	26.7	43.2	66.4	55.9	41.0	38.5	78.4	48.2	50.3	30.2
Q9：「社会における大学や学問の位置づけについて考える」ことができましたか。	25.6	27.8	23.3	22.7	32.0	41.6	35.9	32.7	51.6	20.4	31.4	30.8
Q11：「高知における高知大学の存在意義について考える」ことができましたか。	12.8	29.2	13.3	15.9	29.6	27.2	41.7	40.4	42.3	29.6	28.2	39.9
Q13：「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する」ことができましたか。	79.5	75.0	46.7	59.1	78.4	66.8	68.0	67.3	79.4	68.5	68.9	14.9
Q15：「議論の基本的な進行方法と合意形成の手法を修得することの重要性を認識する」ことができましたか。	43.6	31.9	23.3	31.8	38.4	38.6	40.4	23.1	63.9	31.5	36.7	32.1
平均	42.3	47.9	29.2	36.1	53.5	49.5	44.1	42.1	64.2	43.1	45.2	
変動係数（%）	51.0	35.6	44.0	43.7	34.5	30.2	28.6	31.7	19.5	35.9	30.0	

表の右下に示されているように全体を通じて「はい」という回答率は約45%となった。しかし回答率は、質問項目や学部（コード）によって大きく変動した。具体的には、「はい」の回答率は、「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する」ことができましたかという問いで最も高い値（69%）を示し、「高知における高知大学の存在意義について考える」ことができましたかという問いで最も低い値（28%）を示した。

学部（コード）間では、医学部医学科の「はい」の回答率が他の学部よりも高い値を示し、特に「卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識する」ことができましたか、「卒業時にどのような能力をつけておくべきか考える」ことができましたかという2つの問いに対する「はい」の回答率はそれぞれ69%と78%と高い値を示した。教育学部でも同様の傾向がみられた。その理由として、医学部医学科と教育学部では回答理由の中にもそれぞれ「医師」や「教員」という言葉が頻繁に挙げられており、1年次において卒業後の将来像を明確に描いている受講生が多いことが影響していると考えられた。また、最も回答率の低かった高知大学の存在意義に関する問いでは、農林海洋科学部、地域協働学部、医学部医学科が約40%と比較的高い値を示し、それらの学部や学科では地域に密着した教育と研究が行われていることが窺われた。

また年度末に、副分科会長（自己点検・自己評価部会）の小野寺先生（理工学部）による令和5年度のシラバスチェック後、シラバスの修正が行われた。

### 3. FD 活動

本分科会の位置づけ、並びに取り組み状況を委員間で共有した。他の分科会や大学全体での FD 実施に関連する情報については担当委員内での共有を図った。

前年度の活動報告書においては、新型コロナウイルス感染症対策による授業の弊害事例として、受講生同士の交友活動、並びに意見・情報交換を活発に行うことが困難で、教員からのサポートを受け難いことを挙げる一方、オンライン授業の利点として、ファイルの共有の便利さが挙げられ、moodle や Microsoft teams 等を適切に利用し、コロナ感染状況に柔軟に対応する必要性が指摘されていた。

今年度も、新型コロナウイルス感染症対策により、授業の一部をオンライン授業とする等の対応がとられたが、一例として、オンライン授業ではライティング講座を実施することで、受講生のスキルの底上げをはかり、対面でのゼミでは、グループワーク等を行うことで、受講生間や教員との意見・情報交換を活発に行うといった、前年度からの上記の課題の解決に取り組む実践もみられた。それぞれ学部、学科、コース等の単位で FD を実施しながら、授業改善に取り組んだ。

## 2 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長  
俣野秀典（地域協働学部）

### —カリキュラム編成活動—

#### 1. 令和4年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部へ依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。また、新型コロナウイルスの影響で、一部、定員の増減があった。

#### 令和4年度開講授業題目

人文社会科学部開講セミナー	7 題目
教育学部開講セミナー	1 題目
理工学部開講セミナー	3 題目
医学部開講セミナー	2 題目
農林海洋科学部開講セミナー	1 題目
地域協働学部開講セミナー	4 題目
自由探求学習	2 題目
学びを創る	1 題目
国際協力入門	1 題目
地域防災入門	1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

#### 2. 令和5年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

## —自己点検・評価活動—

副分科会長 佐竹 泰和（教育学部）

令和4年度は、計23の課題探求実践セミナーが開講された。そのうち、学部・学科によるものが18科目であった。ここでは、学部・学科開設の18科目について授業改善アンケートの結果を概観する。

授業改善アンケートは、「課題探求・問題解決力」と「協働実践力」に関する問いなどから構成される。各問に対する回答を見ると、いずれの科目においても積極的な回答が多かった。たとえば「この授業は、「答え」がない課題に取り組む意味を理解できるようになるために効果がありましたか」という問いに対して「はい」または「どちらかというとはい」が占める割合は、最も高い科目で100%、最も低い科目で83.3%であった。また、「協働実践力」に対する問い「この授業は、グループでの活動で全員の合意や全員参加を常に意識できるようになるために効果がありましたか」に対しては、同回答が最も高い科目で100%である一方、10%台の科目も見られた。その理由として「グループワークは実施していない」ことが挙げられるが、コロナ禍のためにグループワークの実施に制約があった可能性が考えられる。学部・学科によって授業形態や授業目標が異なること、また個々のアンケート項目を記述するには紙幅が限られることから、以下では、両問いに対する自由記述を用いて、質的側面から授業改善の方向性を検討したい。

科目によっては自由記述の回答数が少ないため、学部・学科開設の18科目を学部ごとにまとめ（医学科と看護学科を除く）、それらを外部変数としてKH Coderを用いて共起ネットワーク図を作成した。円の大きさが当該語の頻度（Frequency）を、Degreeは外部変数とつながっている数を、円をつなぐ線が両者の関連性を示す。その共起関係の算出にはJaccard係数を使用した。以下、図1に「課題探求・問題解決力について印象に残っていること」、図2に「協働実践力について印象に残っていること」に対する結果を示す。

図1より、課題探求・問題解決力で印象に残っていることは学部・学科間で違いがみられた。地域協働学部と教育学部では、「実際」や「考える」との関連が強い。教育学部では、本科目を学校インターンシップと位置づけ、学校現場に出向いて教師の仕事を経験する活動を行った。そのため、現場での経験を踏まえた探求活動を実践できているものの、一方で、他の学部学科のように「自分」で「問題」を設定し、「解決」するような活動を促す取り組みに欠けていると考えられる。

また、図2より、協働実践力については、「グループ」、「意見」、「協力」などが学部・学科をまたがる語として見られる。教育学部においてもこれらの語に繋がるが、一方で「自分」、「人」、「作業」、「課題」などとの関連がみられないように、一人一人が何かしらの作業に従事するような課題に欠けていた。

授業改善のためには、自由記述のような質的評価にも目を向ける必要がある。簡易ながらこのようなテキスト分析を行うことで、質的側面から課題を検討することができた。

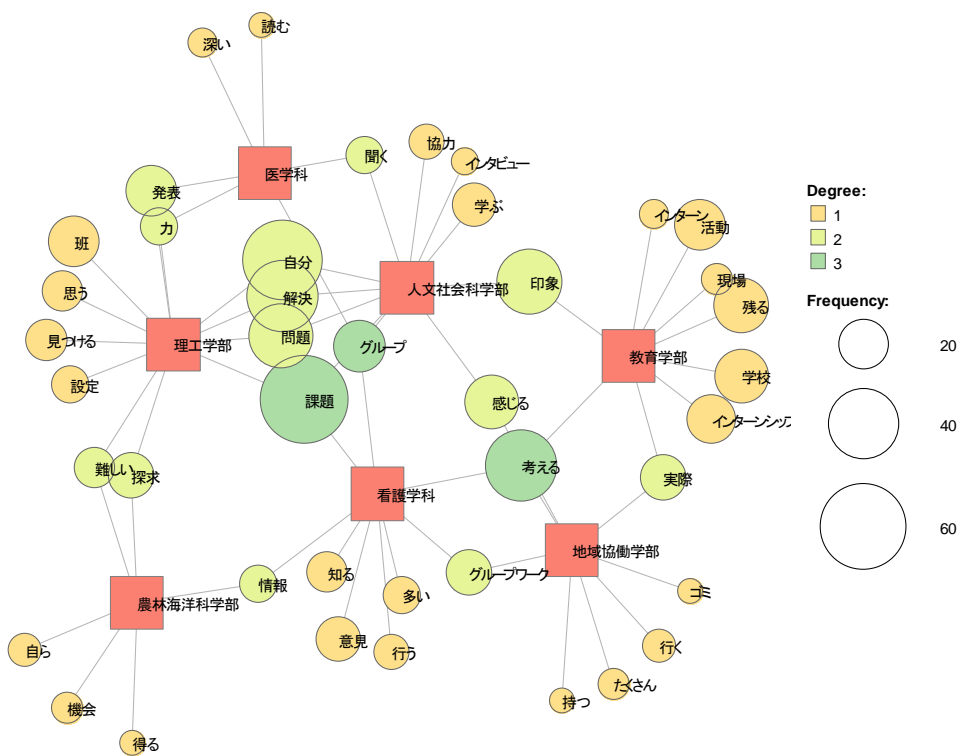


図1 学部学科を外部変数とした「課題探求・問題解決力」の共起ネットワーク

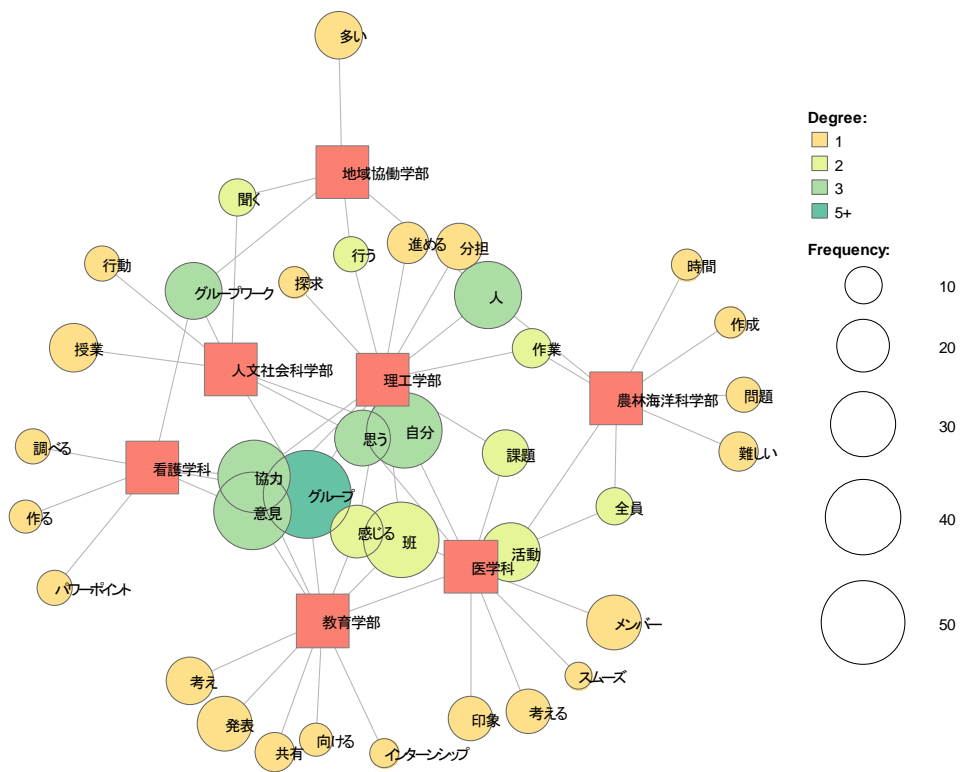


図2 学部学科を外部変数とした「協働実践力」の共起ネットワーク



本年度も FD 関連のイベントへの参加はあまり多くはないが、担当者それぞれが自身の授業で「授業改善アクションプラン」に取り組んでおり、「授業改善支援プログラム」（学び創造センターによる支援）を前期に実施している。なお、「スチューデント・フィードバック」の本年度の実施は確認されていない。

今年度の活動計画に記載されていた以下の5項目については、新型コロナウイルスの影響もあり、項目2・3・4・5への参加が確認された。春季FDセミナーとして実施される「ファシリテーション研修」は、課題探求実践セミナーをはじめとしたアクティブ・ラーニング系科目における教育力向上を意図されており、課題探求実践セミナー担当者の参加が少数にとどまっていることは課題といえる。

当初想定していたセミナーの他に、大学授業入門（4月開催）・学生の学びを支援する授業準備ワークショップ（9月開催）・新任教員のためのリフレクションセミナー（2月開催）への参加もあった。

1. 外部セミナー（7月開催）への参加
2. SPOD フォーラム（8月開催）への参加
3. 秋季FDセミナー（9月開催）への参加
4. 全学FDフォーラム（9月開催）への参加
5. 春季FDセミナー（2月開催・学内ファシリテーション研修）への参加

課題探求実践セミナーは、教員が教え込む授業ではなくグループワーク型の授業であることから、OJT-FD教員の参加および受け入れが最も有効なFD活動の一つであると考えられる。来年度も引き続き、「自由探求学習」などチームビルディングに力を入れている授業への受け入れを通して、学生の変容とファシリテーターとしての教員の役割を体感・体得できるように取り組んでいきたい。また、「グループワークのはじめ方／失敗しないための導入とチームビルディング」「グループワークのためのファシリテーション入門」への参加呼びかけを行いたい。

令和4年度のFD活動のうち、課題探求実践セミナー担当者（令和4もしくは5年度担当）が参加した代表的なものは以下のとおりであった。

4月	大学授業入門	4名
9月	秋季FDセミナー	3名
	全学FDフォーラム	10名
2月	リフレクションセミナー	5名
	春季FDセミナー	2名
前期	グループワークのはじめ方	3名

### 3 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 仲野英司

以下、各学部・学科（分野）の学問基礎論実施報告に基づき、1) ①カリキュラムと実施内容、②自己評価・点検のまとめ、および2) 全体総括を行う。

#### 1) ①カリキュラムと実施内容、②自己評価・点検

##### 人文社会科学部（全体）

###### ① カリキュラムと実施状況の概要

###### 【人文科学コース】

既往のプログラムに基づくクラス分けを再編成し、テーマ別の6クラスを設定した。学生は下記のクラスから2つを選択し受講した。Aクラス（異世界に踏み入る／宗教学・中国古代史・考古学）、Bクラス（哲学・歴史学・心理学の観点から人間の機微を探る／哲学・西洋史・心理学）、Cクラス（恐怖：心理学と英文学の観点から／心理学・英文学）、Dクラス（近代について学ぶ／米文学・日本近代文学・日本近代史）、Eクラス（言葉と物語／日本古代文学・日本語学・言語文法論）、Fクラス（中世を読む／日本中世文学・日本中世史）

###### 【国際社会コース】

学生の希望をもとに小人数にクラス分けをして、計2クールのミニゼミナールを行い、各ミニゼミナールでは2年生からのゼミ研究を念頭に、各専門分野の調査方法の基礎を学んだ。第1回は全体授業で、ゼミ及び専門教育での学びについて講義し、第8回授業ではゼミ分属のための交流会を実施した。第15回授業は2年生から所属予定のゼミに分かれ、ゼミ別オリエンテーションを行った。

###### 【社会科学コース】

学生の希望をもとに小人数にクラス分けをし、1つのクラスに3名の教員がローテーションで授業を行い、1クラスあたり合計3冊の本を読んだ。1冊の本につき、4回の授業を行い、その内訳としては、1回目から3回目においては本を読みながら、レポートの書き方や資料収集の方法を学び、またグループワークを中心に意見交換の機会を設け、4回目はまとめ回として、指定本について報告を行った。

## ② 自己点検・自己評価の概要

### 【人文科学コース】

プログラムの枠にとどまらない、学生の多様な関心に応えることを狙いとした編成であったが、学期終了後に聴取した希望プログラムをみると、特定分野への偏りが目立たなくなり一定の効果があったといえる。

### 【国際社会コース】

ミニゼミでの学びや学問基礎論の授業自体に対する学生の満足度は、アンケート等を見ると高いことが分かるが、学問基礎論での学びが、2年生以降の学修計画、ゼミ選択に直結できていない点が課題である。来年度はシラバスを大きく見直すことを検討している。

### 【社会科学コース】

アンケート等をみると、大学で学んでいくための基礎的な能力（本を読む力、レポートの書き方、コミュニケーション能力等）は一定程度、身につけているようである。今後は、学生が、より多くの学問分野に興味を持ち理解を深めることができるように、授業内容を検討していく。

## 地域協働学部（全体）

### ① カリキュラムと実施状況の概要

地域での協働に必要となる要素について、研究、実習、地域の観点から上級生や社会人の経験をふまえて考えるとともに、地域を理解するための基礎となるコミュニケーション力、共感力、関係性理解力、情報収集力などに関する内容に関して、対面及び同期型オンライン（Zoom）で実施した。また、キャリア教育についても1コマ実施した。

### ② 自己点検・自己評価の概要

15週目アンケートの結果（n=52；全受講生62名中82%）を見る限り、授業については概ね問題はないと思われる。コミュニケーション力の育成については、対面及び同期型オンラインでグループワークを実施した。授業方法を工夫したことにより、前年度よりは学生の評価は改善したとみられるが、引き続き、次年度に向けて内容・方法の改善が必要である。

## 教育学部（全体）

### ① カリキュラムと実施状況の概要

担当教員は計6名である。年度初めから検討会を開催（計8回開催した）し、シラバスを作成し、授業を実施し、成績評価を行なった。

検討会では、まずもって過年度のプログラムや実施の形態、全学的な基本方針を担当教員全員で検討したうえで、シラバス作成に着手した。過年度では、基本的に受講学生は6グループに分かれ、各グループに1名の担当教員が付き、各教員の裁量に基づいてそれぞれに授業が展開されていた。諸事項の共通理解の状況は不明であるが、全体的な統一性に欠けていた可能性について意見が出された。学問基礎論はあくまでも1つの授業であり、仮にグループに分かれてそれぞれに授業展開するにしても、目的・目標・ポイント等々については十分な検討を経て確実に共有されておかねばならないと考えた。このことは、成績評価の観点からも重要である。そこで、今年度は統一的なプログラムを準備することとし、必要に応じてときにグループに分かれて授業を実施することとした。また、内容については、学問基礎論の位置づけ、全学的な基本方針、学部事情（1年生は後期にコース分属希望を提出する）等を踏まえたうえで、以下の3つの柱を立てることとした。

- (1) 私は、なぜ、どのようなことを、どんなふうに学びたいのか？
- (2) この教育学部において、どのような専門的な学び（学問）に触れることができるのか？
- (3) 学びを進める際に求められる遵守すべき学問的ルールとは、どのようなものか？

結果、下表のようなシラバスを作成するに至った。

授業科目の主題	①私は、なぜ、どのようなことを、どんなふうに学びたいのか？ ②この教育学部において、どのような専門的な学び（学問）に触れることができるのか？ ③学びを進める際に求められる遵守すべき学問的ルールとは、どのようなものか？					
授業科目の到達目標とカリキュラムチェックリスト	授業科目の到達目標	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・規範
	①これまでの学びとこれからの学びについて省察できる			◎		
	②教育学部における専門的な学びについて探究できる		◎			
	③遵守すべき学問的ルールについて説明できる	◎				
授業全体の概要	本授業では、教育学部における専門的な学びのイメージを形成するために、さまざまな個人ワーク、グループワークを実施します。下記の本授業のねらいを十分に踏まえたうえで主体的にワークに取り組んでください。 ①私は、なぜ、どのようなことを、どんなふうに学びたいのか？ ②この教育学部において、どのような専門的な学び（学問）に触れることができるのか？ ③学びを進める際に求められる遵守すべき学問的ルールとは、どのようなものか？ 対面実施を基本としますが、活動方針レベルが上がった場合には、オンライン同期型授業に切り替えることがあります。講義連絡等を見逃すことがないようにご注意ください。					
授業時間外の学習	毎回の授業内容を復習するとともに、本授業科目の主題について考えてみてください。					
授業計画						

第1回	オリエンテーション（学問基礎論の目的・内容・方法・評価）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第2回	これまでの学びの振り返り（高校までと大学の学びの違いの確認、自分自身のこれまでの学びの省察）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第3回	日常生活の関心事と教育との関連（関心事の具現化、探求の意義や必要性の認識、資料選択に関する省察）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第4回	これからの学びを考える1（ディスカッションを通して、今後自身の主体的な学びの方向性を考える）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第5回	これからの学びを考える2（前回の結果を踏まえた、受講生によるプレゼンテーション）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第6回	本学部ではどんな専門的な学びに触れることができるのか？：指定教員についての個人ワーク
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第7回	本学部ではどんな専門的な学びに触れることができるのか？：指定教員についての小グループワーク
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第8回	本学部ではどんな専門的な学びに触れることができるのか？：コースについてのグループワーク
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第9回	各コースでの専門的な学びについての全体共有
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第10回	アカデミックライティング①（学生総合支援センター 坂本智香先生）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第11回	アカデミックライティング②（学生総合支援センター 坂本智香先生）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第12回	研究倫理・情報ソースの種類と特徴他について
	評価のスケジュール：プレゼン他
	授業時間外学習：各自割り当てられたテーマについて調べる
第13回	リテラシー・認知バイアスについて
	評価のスケジュール：プレゼン他
	授業時間外学習：各自割り当てられたテーマについて調べる
第14回	文献検索の仕方
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容
	授業時間外学習：授業内容の復習
第15回	本授業のまとめ（私にとって、学問基礎論とは何だったのか？）
	評価のスケジュール：大福帳での振り返りの内容

	授業時間外学習： 授業内容の復習
教科書・参考書	とくになし。
成績評価の基準と方法	大福帳での振り返り内容 : 45% プレゼンテーション&レポート : 55%

大学の活動方針レベルの変更に伴って学期末はオンライン同期型に移行したが、基本的には対面形式で授業を実施した。全員が集合しての授業、グループに分かれての授業が混在したが、KULAS や moodle を活用しての周知等により、混乱は生じなかった。また、資料は毎回事前に moodle に掲載し、授業時には受講学生が各自で持参した。成績評価の材料の一つである大福帳（コミュニケーションカード）も moodle 上に設定し、受講学生は毎授業終了時に、授業内容をめぐって思考したことを入力した。

## ② 自己点検・自己評価の概要

過年度の学問基礎論をめぐるさまざまな資料を検討したうえで、今年度は統一的なカリキュラムを構成し、共通理解を図ったうえで、授業展開を試みた。「概ね良かったのではないか」というのが、担当教員の総意である。しかしながら、以下のような反省点も見出された。

- (1)各回の到達点について、さらに担当教員間で共通理解を図ることができればよかったのではないかと。そのためにも、各回で用いるワークシート等を作成しておけばよかったのではないかと。
- (2)グループワークにあっては、その取り組み方に個人差がみられる場合があり、受講学生に対する働きかけには工夫の余地があった。
- (3)坂本先生のアカデミックライティングのご講義は、他学部でもそうであるように、もっと早い時期に（具体的には、1学期の大学基礎論において）実施したほうがよかったのではないかと。
- (4)教育学部特有の事情ではあるが、1年生がコース分属希望を提出するのは10月末であり、それを考えると、柱の「②この教育学部において、どのような専門的な学び（学問）に触れることができるのか？」も部分的には大学基礎論等に移行したほうがよいのではないかと（教員について調べる作業など）。
- (5)過年度からの流れで、KULAS では6つのクラスが設定されていたが、何の益もなく、次年度からは大学基礎論等と同じように1つに統合してよい。

また、第15回授業時には、e-ポートフォリオの授業評価アンケート(Reflective Monitoring)を活用し、受講生の意見を聴取した。あるクラスの結果は、以下のとおりである。おおむね良好であるといえそうだが、有意義な時間外学習の促しについては課題として挙げるができる。

【設問1】あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

【設問2】この授業では、あらかじめ示された授業の到達目標や成績評価基準を意識して授業に取り組むことができましたか？

5点	15回 (30回) 出席	
	7人	33%
4点	13回～14回 (26回～28回) 出席	
	8人	38%
3点	11回～12回 (22回～24回) 出席	
	6人	28%
2点	10回 (20回～21回) 出席	
	0人	0%
1点	その他	
	0人	0%

5点	強くそう思う	
	3人	14%
4点	そう思う	
	16人	76%
3点	どちらともいえない	
	1人	4%
2点	そう思わない	
	1人	4%
1点	まったくそう思わない	
	0人	0%

【設問3】あなたはこの授業のために、1回分の授業について、授業期間を通じて平均どのくらい授業外学習時間をとりましたか？

【設問4】あなたがこの授業のためにとった授業外学習時間は、授業内容の理解やスキル、技術の習得にとって適切なものでしたか？

【1】	5時間以上	
	0人	0%
【2】	4時間以上～5時間未満	
	0人	0%
【3】	3時間以上～4時間未満	
	1人	4%
【4】	2時間以上～3時間未満	
	2人	9%
【5】	1時間以上～2時間未満	
	9人	42%
【6】	1時間未満	
	8人	38%
【7】	0時間	
	1人	4%

5点	強くそう思う	
	4人	19%
4点	そう思う	
	14人	66%
3点	どちらともいえない	
	2人	9%
2点	そう思わない	
	0人	0%
1点	まったくそう思わない	
	1人	4%

【設問5】あなたにとってこの授業の難易度はどの程度でしたか？

5点	とても難しかった	0人	0%
4点	難しかった	4人	19%
3点	ちょうどよかった	17人	80%
2点	易しかった	0人	0%
1点	とても易しかった	0人	0%

【設問6】この授業で使用された教科書や配付資料、Web教材などは、あなたの理解を促進する上で効果的でしたか？

5点	強くそう思う	7人	33%
4点	そう思う	13人	61%
3点	どちらともいえない	1人	4%
2点	そう思わない	0人	0%
1点	まったくそう思わない	0人	0%

【設問7】この授業では、受講生の理解を促進するために、授業方法や授業時間外に行う課題などについて工夫や配慮がなされていましたか？

5点	強くそう思う	1人	4%
4点	そう思う	15人	71%
3点	どちらともいえない	5人	23%
2点	そう思わない	0人	0%
1点	まったくそう思わない	0人	0%

【設問8】この授業では、シラバスの到達目標に示された知識や技能、思考方法やスキルなどが身につく、総合的に満足できましたか？

5点	強くそう思う	3人	14%
4点	そう思う	16人	76%
3点	どちらともいえない	2人	9%
2点	そう思わない	0人	0%
1点	全くそう思わない	0人	0%



【設問9】あなたは、この授業の到達目標「学問から得た気づきを簡潔に表現できる」が達成できましたか？

5点	強くそう思う	2人	9%
4点	そう思う	13人	61%
3点	どちらともいえない	6人	28%
2点	そう思わない	0人	0%
1点	全くそう思わない	0人	0%

【設問2】回答理由

この授業では、あらかじめ示された授業の到達目標や成績評価基準を意識して授業に取り組むことができましたか？

<強くそう思う／そう思う>

- ・深く学べたため。
- ・グループワークをする中で、自分の考えを他の人に伝える機会も多く、他の人の話を聞く機会も多かったため意識することができた。
- ・到達目標が明確に示されていたから。
- ・なんのために授業を行っているのか意識できたから。
- ・資料を作成する際や文章を書く際に、他の人に伝わりやすいよう工夫した。
- ・授業内容の pdf を用いて授業を聞いて、その説明を聞き理解できたと思うから。
- ・授業の初めに全体の流れについて解説があるから。
- ・授業の始めの先生の説明やグループ活動の中で、授業の目標を意識し取り組むことができたから。
- ・学んだことが多かったから
- ・授業をしっかり聞いて、課題に取り組むことが出来たから。
- ・なぜこのような学習を行うのかという意味付けをはじめに提示してくれていたと感じる。
- ・理解できたため。
- ・自分中で様々なコースに興味を持ち、幅広い視点で教育を学ぶということができたと思ったから。
- ・グループワークや講義、プレゼンテーションを通して様々な意見考えを得たり、自分の考えなどを深めて教育に対する見方が変わったから
- ・評価基準は意識できたが、授業の到達目標は明記されているときでない限り意識できなかった。
- ・自分なりに到達目標を意識し授業に臨めたから
- ・授業前に資料が公開されており、その回の内容を見ることができたから。また、授業内でもまず何を学ぶかの提示があったため。

<どちらともいえない>

- ・その時その時に出された課題に対して意識がいきがちだったため。

<そう思わない>

- ・授業が始まったころは本授業の重要性をしっかりと認識しておらず、到達目標などについて自分自身が真面目に考えていなかったから。

【設問4】回答理由

あなたがこの授業のためにとった授業外学習時間は、授業内容の理解やスキル、技術の習得にとって適切なものでしたか？

<強くそう思う／そう思う>

- ・楽しく学べたため
- ・自分が考えていたことを改めて言語化することによって、自分の中で考えを整理することができたから。
- ・授業に必要な資料作りをしたから。
- ・自分1人で考える時間があったから。
- ・あらかじめ資料を読み、予習を行っておくことで授業に出た際に内容をはやく理解できた。

- ・レポートなどを書いた時には、自分でどのような資料にしようか、何について書こうか、どのように書けば相手に伝わりやすいかなどを考えて書いたから、学習内容の習得に役に立ったと思う。
- ・主体的な活動が多いので、他の人と考え方を比較することができるから。
- ・個人での学習を通して、授業の内容の理解をさらに深めることができたから。グループワークの利点を知れた。
- ・レポートの書き方やメディアリテラシーなど教師になるにあたって大切なことを学ぶことができたから。
- ・授業で提示されたことに対して自分で調べたりまとめたりすることができたため、授業内容の習得はできたと考える。
- ・教員について調べていく中で、教育学部で学べることをより深く知ることができたため。
- ・フェイクニュースなど具体的に調べることができ、自分の興味のある話題についてさらに深く学べたから。
- ・資料作りやプレゼンテーションを通して、教師になっても役に立つスキルを身に付けることができた。
- ・授業準備を兼ねた予習に近い学習しかなかったから。
- ・次の授業のための課題をやることは、そのトピックに対して自分の学びをより深めることにつながるから
- ・各コースがどのようなものかを調べることができたから。

<どちらともいえない>

- ・授業外学習時間を設けていなかったから。

<まったくそう思わない>

- ・他の授業の学習時間が減ったため。

#### 【設問5】回答理由

**あなたにとってこの授業の難易度はどの程度でしたか？**

<難しかった>

- ・教育現場や人間の発達など多様な話があり、理解するのが大変な部分があった。
- ・内容自体はちょうどよかったが、今まで自分のことについてじっくり考えたことがなかったため、なぜ学ぶのかといったような問いは少し難しいと感じた。
- ・理解するのに時間がかかったため。
- ・自分は文章を書くことがすごく苦手なので、レポートの講義の際には講義内容を理解するのに時間がかかったから。

<ちょうどよかった>

- ・楽しかったから。
- ・特に難しいと感じたことはなく、むしろとても有意義な時間を過ごすことができたから。
- ・自分の将来に必要なことを学べたから。
- ・考える時間が多かったから。
- ・自分たちで意見を出し合いながら進める印象があるから。
- ・少し難しい部分はあったが、自分で調べたり、友達と意見共有をすることで解決できたのでちょうど良かったと思う。
- ・自分に合っていた。
- ・適度に考えることもグループワークを通して学ぶこともできたから。
- ・知らなかったことを知り、更に理解を深めることができたから。
- ・生徒のことも考慮に入れ、学びやすいように先生方により授業が展開されており興味関心を持ちやすかった。
- ・自分にとって取り組みやすい内容だったから
- ・適切な人数にグループを分けて取り組むことで、発言がしやすかったから
- ・一人で調べるのは難しいが協力することでいろんな考えを持ち寄ることができたから。

#### 【設問6】回答理由

**この授業で使用された教科書や配付資料、Web 教材などは、あなたの理解を促進する上で効果的でしたか？**

<強くそう思う／そう思う>

- ・分かりやすい資料であったから。
- ・今後の大学生活やそれ以降の生活にも生かせるような内容であったから。
- ・見やすい資料が多かったから。
- ・自分が教員になったときに、話せるネタなどに役立つようなものがあったから。
- ・声の説明だけでは理解しにくいことでも、資料があることで図式的に話の流れを理解することができたから。

- ・ pdf 資料などには、授業内容を分かりやすくまとめられていたから。
- ・ 何を伝えたいのかがはっきりしていたから。
- ・ Web 教材や資料があったことで、より分かりやすい、理解しやすいと感じたことが多くあったから。
- ・ 先生が言うだけだと聞き逃しがあつたから。
- ・ アカデミックライティングで配布された資料はこれからの大学生活や人生において大切なことを書いてくれているから。
- ・ 講義を聞いていても理解が追い付かないところなどは資料を見返して、理解を深めることができた。
- ・ 簡潔にまとめられていたため。
- ・ 特にレポートに関する資料は、資料があることでどのようにすればいいのかわかりやすかつたため。
- ・ 授業内容で聞き逃してもう一回見たいところがしっかり補足されており、理解が深まつた。
- ・ 分かりやすく書かれていて、自分にとっては理解しやすいものだと感じたから。
- ・ 資料を読んで振り返ったり予習したりすることで理解がより深まつたから
- ・ 授業内での振り返りや、自分で授業を理解するために資料をゆっくりと読むことができたから。
- ・ 細かいところまで説明されていたから。

#### 【設問7】 回答理由

**この授業では、受講生の理解を促進するために、授業方法や授業時間外に行う課題などについて工夫や配慮がなされておりましたか？**

<強くそう思う/そう思う>

- ・ 毎回振り返りを行っていたため。
- ・ グループワークの機会が多く、授業目標を意識しやすいような授業になっており、そのための課題などもあつたため。
- ・ 課題がいくつかあつたから。
- ・ 出された課題は自分1人で考えるものが多く、自分自身で見つめ直すいい機会となつた。
- ・ 授業終わりに次回の資料を送ってくださっていたので、予習をし、ある程度理解したうえで授業に臨めた。
- ・ 授業内容に即したものが多かつたから。
- ・ 自分で調べてくる課題で理解が深まつたと感じたから。
- ・ 授業の中の先生のお話から、工夫や配慮が感じられたから。  
パワーポイントの資料があつた。
- ・ 大福帳の記入やグループワークにおける資料作成など適度な量の課題であつたから。
- ・ グループワークが多く、自身の意見を深める機会が多かつたため。
- ・ その日授業があつたことについての内容や、次の授業に入りやすいようにその話題について先に学べるように設定されていた。
- ・ グループワークや資料作り、講義を行って他の人と関わりながら活動をして、とても充実していたから。
- ・ 一人で考える時間と協力して考える時間のバランスが取れていたから。

<どちらともいえない>

- ・ 基本的には理解できていたが、少し漠然としたところがあり何に取り組めばよいかわからない時があつた。
- ・ 課題が出されるだけで(例がなく)中身は自分で考えないといけないため。
- ・ コロナウイルスの影響もあつて難しかったところもあると思うが、グループワークや数人での話し合いがもっと活発にできたらよかつたと思つたから
- ・ 大福帳により自分自身での授業の振り返りをすることはできたが、どれも授業の感想になってしまいがちで理解を促進するためのものとは思わなかつたから。

#### 【設問8】 回答理由

**この授業では、シラバスの到達目標に示された知識や技能、思考方法やスキルなどが身につけ、総合的に満足できましたか？**

<強くそう思う/そう思う>

- ・ グループで話し合いを行つたため。
- ・ グループワークを通して、伝えることと聞くことの両方のスキルを成長させることができた。
- ・ 様々な授業を通して、自分に必要な知識を身につけられた。
- ・ 教員として必要なスキルである簡潔な表現や発達への理解などが身についた。
- ・ 教育学部についてのこれから行う学習について理解できたと考えるから。
- ・ 正解がない中で自分なりに答えを導き出すことが習慣化したから。
- ・ 個人で思考したり人と意見交換をする場面が多くあり、思考方法などが身についたと感じたから。
- ・ 身についたと感じたから。
- ・ 大学や将来で使える様々なスキルを学ぶことができたから。
- ・ 毎回の授業で提示された目標については基本的に達成できていたと思う。

- ・自分の学びたいことを考えられたため。
- ・レポートを書く際に必要なスキルが今後、特に役立つと考えたから。
- ・今回の授業を通じて自分になかった考え方や様々な先生の教育に対する考え方を聞けたので経験として大きなものになった。
- ・授業の中で様々な分野の課題に取り組み、とても有意義なものにできたと感じたから
- ・いつもは考えないような深いところまでよく思考することができたから
- ・自分で調べ人と共有し発表することができたから。

<どちらともいえない>

- ・シラバスの到達目標などを自分自身で理解しておらず、それらが身についたもついてないも判断することができないから。

#### 【設問9】 回答理由

**あなたは、この授業の到達目標「学問から得た気づきを簡潔に表現できる」が達成できましたか？**

<強くそう思う／そう思う>

- ・深く学べたため。
- ・グループワークで自分の考えを伝える機会が多く、その際に表現できたため。
- ・自分的に、人前で発表することが苦手だったが自分の気づきなどをみんなの前で発表できた。
- ・教員には短く簡単に理解しやすい説明をすることが求められていると私は考えている。自分で資料を作成したり、前に立ち発表したりする際に、なるべく簡潔な説明になるよう工夫した。
- ・大福帳で授業内容について考えたことをまとめる際に、簡潔な表現を行おうと頑張ってきたから。
- ・話し合いの中で、簡潔に説明することが増えたから。
- ・毎回の大副帳の入力の際に、授業で得た気づきを簡潔に表現できていたと思うので、授業全体を通してこの授業の目標を達成できたと思うから。
- ・授業に対しては沢山のことを学んだが簡潔に表現するのは私にとって難しいから。
- ・グループワークを通して、自身の気づきを簡潔に伝える方法を学ぶことができたから。
- ・この授業を通じて様々な視点から物事を見るということが重要であることを学んだ。教育の面でもそうだが、フェイクニュースのところでは様々なメディアを比較して考えるなどとても大事な力だと感じた。
- ・学問からいろいろな気づきを得ることはできたと思う。簡潔に表現できるかどうかは自信がないが言葉で表現することはできるようになったと感じるから
- ・自分なりに授業内で得たことを、最後の福帳にまとめることができたと思うから。
- ・コースやその分野がどのようなもので何に役立つかを調べ、発表することができたから。

<どちらともいえない>

- ・簡潔には説明できる自信はないから。
- ・理解はできたが人に伝える伝えるために表現するのは少し難しいところがあった。
- ・表現するのに時間がかかるため。
- ・学んだことは多くあったが、これからもっと時間をかけて学んでいく必要があると感じたから

また、第15回授業では、「私にとって、学問基礎論とは何だったのか？」というテーマに基づいて大福帳に入力するよう要請した。そのいくつかを、以下に掲載しておく。

私にとって、学問基礎論はこれからの大学での学びにおいて自分が学びたいことの目星をつけるためのものだったと考える。初めに、大学での学びはこれまでの学びと何が異なるのか、自分の学びたいことは何かについてまとめて、大学での学習目標を決めるとともに学びに対するモチベーションを高めることができた。また、他の人がどういったことを学びたいのかについて話を聞き、それぞれ学びたいことや理由が異なり、自分にはなかった考えを取り入れることができてよかった。次に、教育学部での専門的な学びについて学んだ。私は数学教育コースについてどういった学びが行われているかを調べた。現代の社会問題を解決するために数学を用いるといった研究がなされており、学びを社会に還元するといったことが行われていると理解した。他のコースについても、これまで聞いたことのない研究をさ

れている方がたくさんいて、1つのコースだけを学ぶのではなく、他のコースの先生方の話も聞いてみたいと思った。また、2年生になってからは初等教科の指導法を学ぶことになる。全教科の指導法を学ぶ必要がある中で、学問基礎論を受けて各教科の学ぶ意義や内容について知ることができたのは非常に良かったと思う。最後に、レポートの書き方等について学んだ。自分の学んだことをレポートにまとめる際には様々な決まりごとがあり、引用する際に方法を誤ってしまうと剽窃になってしまうといった場合もあることを知り、十分に注意しなければならないと思った。現在、レポート作成時にアカデミックライティングで学んだことを生かすことができている。

前期の大学基礎論に比べ、より自分のこれからの4年間についての具体的なことについて考える時間となった。特に序盤の教育学部で何を学びたいかについては、改めて自分が何をしたいのかということ言語化することができたし、他の人の話を聞く中で自分もそれらを学びたいと感じることも多々あったため有意義な時間を過ごすことができた。今回の講義ではこのようなグループワークをする機会が多く、自分の考えを資料にまとめて発表する機会であったり、他の人の発表を聞く機会がとても多くあったため、この授業の目標をより意識して授業を受けることができた。また、各コースで学べることを調べた際には、自分の進むコースだけでなく他のコースのことについても調べることで教科横断的な学びをする必要性を知る良いきっかけとなった。自分は社会科教育コースに進む予定だが、各教授の研究内容やそのコースでは具体的にどのような学びをすることができるのか知らないことのほうが多かったためとても良い時間となった。そして、レポートを書く際の注意事項やフェイクニュースに関する講義では、自分の知らなかった知識も多くあった。また、フェイクニュースの講義の際には、自分の発表資料を作るために普段見ないような様々なニュースを見ることで自分の周りには真偽が定かでない多くのニュースがはびこっているということを知るきっかけとなった。これらの講義の中には今後の大学生活やそれ以降の生活においても役立つものが多くあったため、忘れず生かしていきたいと感じた。

学問基礎論を受講するまでは大学で学んでいるが、どうしてこのことを学んでいるのか、この学びは何に生かすことができるのか全然考えられていなかった。ただ、講義があるから学んで、そして、テストがあるからそのために勉強をするという感じだった。また、レポートについてもただ自分の意見を述べただけのレポートだったり、インターネットから高校生の時までに学んだ注意事項を活用して参考文献としたレポートだったりを提出していた。この学問基礎論を受講してまず大学で何が学びたいかを再確認することができた。どうして高校三年生の時に教育学部を目指したのかを改めて考え直すきっかけとなった。そして、どうして教員になりたいのか、どういう教員になりたいのかをまた考えることができた。これらを考えることができたため、講義をどう受けたらいいのか、どのような視点をもって講義に臨んだらいいのかを考え直し、新たな気持ちで講義を受講できるようになった。また、

どういう教員になりたいか考えることができたため、来年からのコース選択でどのコースに行くのかしっかり考えることができた。様々な講義を受けたり、ボランティア活動をした  
りする中で、入学当時に思い描いていた教員や子どもとの関わり方が変わってきたためど  
のコースに行こうか悩んでいたが、学問基礎論でコースのことを自分で調べたりして、どう  
いうコースが自分に合っているのかを知ることができた。学問基礎論でこのような活動が  
なければ、ここまで真剣に考えずにコース選択をし、結果後悔していたと思う。学問基礎論  
で教員になることがどのようなことなのか、どのように大学の時に学ばばいいのかを考え  
るきっかけとしてできてよかった。そして、レポートを高校生の時までの知識で一学期や学  
問基礎論でレポートについて学ぶまでは書いていた。しかし、アカデミックライティングや  
そのほかのレポートの記述について学んで、これまで自分が書いていたレポートが間違っ  
ていたことに気が付いた。そこから、正しい書き方を学ぶことができた。もし、学問基礎論  
でレポートの書き方について学んでいなかったら非常に危なかった。また、インターネット  
の情報についてもどのように利用したらいいのかを学ぶことができた。これまでは自分が  
信じてしまったインターネットの情報をレポートに使用したりしていたが、これからは正  
式な機関が発表している情報だけをレポートに使用しないと学んだ。今回学ん  
だレポートの書き方、インターネットの使用の仕方を正しく活用し、正しいレポートを作成、  
提出していきたいと思う。このように、私は学問基礎論を受講し学ぶこと気づくことが多か  
った。学問基礎論は私にとって非常に学びの場であった。

## 理工学部（抜粋）

### 情報科学科

#### ① 「分科会委員ご所属学部のカリキュラムと実施状況の概要」

2進数、機械語、論理回路、Web システム、ユーザインタフェースをキーワードとし  
て、ソフトウェア開発を行う上で必要となるコンピュータのハードウェアの仕組みにつ  
いての知識を中心に、学生の理解力を高めるための演習を行い、情報システム全般の仕  
組みについて習得させた。

#### ② 「分科会委員ご所属学部の自己点検・自己評価の概要」

これまでと同様に Moodle を使った資料提示や課題提出などを行った上で、対面授  
業もしくは収録動画を用いた非同期オンライン授業を実施した。専門的な内容が多く  
なる後半の回においては、対面授業の際に Teams で収録しておき、Moodle から閲覧  
して復習できるようにした。この授業収録動画の閲覧状況は、授業回にもよるが、ほぼ  
半数の受講生が閲覧していた。理解度を確認する試験を3回に分けて実施することで、  
学生が授業を受講する姿勢は緊張感を保つことができていたように感じた。



## 農林海洋科学部（全体）

学部全体で講義初回にアカデミック・ライティングの基礎学習を行った後、学科・コースの分野ごとに独自に学問基礎論を開講し、課題設定や学問的関心を高める試みを行った。講義では学内外の講師による講義、論文読解を通じて今後の学習に必要な知識を身につけると共に理解した内容に基づくグループワーク、プレゼンテーションを対面方式とオンライン方式（同期型、非同期型を含む）を組合わせて実施した。前年度はオンライン主体のため実施できなかったグループワーク、プレゼンテーションが可能となり今後の学生生活に必要な知識・技術を身につける機会となった。

### 農芸化学科

- ① 1 回目はアカデミックライティング（担当：学び創造センター学生支援部門 坂本智香先生）を非同期型オンライン（moodle）で開講した。2 回目以降については、コロナ禍前の実施形式であった学生間のグループワークを通し講義を進めた。主に、当学科の三つの科目群（生物環境化学、動植物健康化学、微生物化学）の課題を発見し、情報収集を行い、論理的に説明するためのスキルを習得する講義を行なった。中間発表と最終発表を行い、相互評価も行った。
- ② 中間発表や最終発表、最終レポートから判断すると、農芸化学科の三つの科目群に存在する課題について、教員からの意見を参考にしたり、ネットや書物を用いて可能な限り情報収集を行い、意見をまとめることが出来ていたと考える。また、e-ポートフォリオで行った授業評価アンケートの結果より、履修学生の満足度も高かったと考えられる。

### 海洋生物生産学コース

- ① 当コースでは、水産関係の和文論文を教材として、「文章の構造を理解し、内容を正確に読み取る」、「内容を的確に短くまとめる（要約作成）」、「理解した内容を分かりやすくに他者に伝える（プレゼンによる発表）」にグループで取り組んだ。さらに、客観的（批判的）自己評価を行うために、グループ内での相互評価を行うとともに、同じ論文を題材としたグループ間での相互比較を学生自身に行わせた。同じ内容を 2 クールに分け、1 クール目は主に対面、2 クール目は teams を用いた同期型 web 授業で行った。また、プレゼン発表については、パワーポイントを用いてナレーションを吹き込み、動画にて配信することで行った。
- ② 一番の大きな目的とした「客観的自己評価」についても、同じ論文を題材としたグループと比較することで、他者との比較・聞き手（見る側）への意識も僅かながら芽生えた様であった。

## 海底資源環境学コース

①アカデミックライティング（担当：学び創造センター学生支援部門 坂本智香先生）とキャリア教育（学生総合支援センター・森田先生）を含めて、所属担当教員によるオムニバス形式で非同期型オンライン（moodle）と対面形式の両形式で開講した。高校の時に地学を受講していない学生および物理や化学の理解が不十分な学生への対応と、大学での専門的な講義に向けての準備として、化学基礎や地学基礎に関する講義、海洋の探索、掘削および管理といった内容の講義を進めた。各講義では、小テスト、レポート、講義態度などを相互的に評価した。

② 大学の専門的な講義を受講する上で、自分に不足している点を再認識するきっかけとなった講義であり、新しい講義内容を理解するために必要な心構えを理解する講義になったと思われる。

## 海洋生命科学コース

① レポート等の基本的な書類作成技術、②科学英語の基礎、③with コロナ時代における自己学習、自己アピールならびに発信のための方法論、などについて講義を受け、グループ学習を行った。とくにグループ学習ではお互いをよく知るための時間を設けるとともに、自己紹介ファイルを相互に閲覧可能とした。さらに、アカデミック・ライティングおよびキャリア教育に関する基礎学習を行った。

② レポートの書き方、英語でのコミュニケーション、ならびに科学の歴史を主体とした講義を行った。これらに必要なワード、パワーポイントおよび Teams の使用についてはしっかりと時間を確保して指導を行った。また、オンサイトの講義の場では、学生らの談笑する姿も見られ、受講生にとっては、学問基礎論本来の持つ意義に加え、他学生との親睦を深めるうえで重要な機会となったことが伺われた。

## 医学部（全体）

### 医学科

#### 1) カリキュラムと実施状況の概要

医学教育の質保証を目的とした医学教育分野別評価の中でも重要視されている行動科学をテーマに授業を展開した。具体的には、脳の基本的な構造と働き、記憶、感情、学習、睡眠、行動変容、ストレス、薬物依存など、解剖学、生理学、精神医学、公衆衛生学といった学問領域を扱った授業を行った。また、今年度は、高知県立高知城歴史博物館館長による、「土佐の医学史」を初めて扱った。授業のスライドは、moodle 上でも確認することができるように配慮し、毎回の授業の最後には moodle 上で小テストを実施、理解度の確認を行った。



## 2) 自己点検・自己評価の概要

今年度の1年生は、対面授業が原則であったことから、対面授業で実施した。しかし、体調不良やコロナに罹患したため欠席となった学生がいたため、後半はハイブリッド形式で授業配信も行った。1回大雪のため休講となったが、その分は非同期オンラインでの実施となった。このように、状況に合わせて、柔軟に授業を展開できたことは評価できた。

## 看護学科

### 1) カリキュラムと実施状況の概要

本科目は大学に入学後まもない1年生を対象に、大学で追求される学問の基盤について理解を深めることを主題としている。看護学科に所属する教員の専門分野をオムニバス形式で展開することで、幅広い内容で授業を展開した。具体的には、学生生活の基盤となる食生活、仕事と学問、法律のほか、看護職としての将来像に関わる人間性、大学院教育などに関するものであった。講義方法は当初対面を予定していたが、COVID-19のクラスターによりやむをえず約半数の回はオンラインで実施した。授業資料はmoodle上で確認することができるようにした。毎回の授業の最後にはmoodle上で小テストあるいは小課題を実施し、理解度の確認を行った。

### 2) 自己点検・自己評価の概要

評価は各講義担当者が行った。最終評価ではほとんどの学生が「良」以上の評価であったことから、専門的に学問とは何かを深く見極めテーマに対して思考することで本科目の主題は達成できたと考える。Teamsやmoodleの活用により、状況に応じて講義を展開することができた。

## 2) 全体総括

学問基礎論に共通の基本的カリキュラムは、「専攻する学問の輪郭を学びます。それぞれの学部・学科で学べる専門分野や研究テーマについての知識を得て、専門教育でこれから学んでいく際の展望を持つことが目標です。このほか、文献検索の方法、学術論文の読み方、レポート作成の技術など、専門教育で必要となる基礎的な知の技法を身につけます。」となっています。この目的に向けて各学部学科(分野、コース)において、それぞれの裁量と工夫により、2年次以降の専門科目を見据えた授業が行われた。レポート作成等の技法に関しては、例年通り学生総合支援センター教員が講義を担当した。今年度は新型コロナウイルス感染拡大が始まって3年目であり、昨年度と比べて対面授業の回数が増えたが、初年次必修科目にもかかわらず、不可の割合が1割程度ある。これを改善する必要がある。

## 4 人文分野分科会

カリキュラム等編成に関する報告

人文分野分科会長 渡邊ひとみ（人文社会科学部）

### 1) 次年度（令和5年度）に向けたカリキュラム編成

第3回共通教育実施委員会において、次年度の担当コマ数（ノルマ科目数）案が提示され、人文分野分科会は計27コマ（人文社会科学部15コマ，教育学部12コマ；センター教員及び非常勤等を除く）を担当することが確認・承認された。この決定を受けて分科会を開催し、学問分野及び専門性のひろがりを考慮したカリキュラム編成を行った。本分科会は「教員数の減少」という大きな問題をかねてより抱えていたものの、複数の分野から構成される開講科目案（授業題目表）を無事作成することができた（次年度に関しては、「哲学」分野から1コマ，「心理学」分野から2コマ，「地理歴史」分野から10コマ，「言語」分野から7コマ，そして「芸術」分野から7コマ）。また，その際には，物部科目の出講者（2名）の選定も行った。

第3回カリキュラム等編成部会及び第4回共通教育実施委員会において，上記開講科目案が承認された。その後，人文社会科学部棟の改修に伴う対応のため，開講時間帯の調整・変更などが年度末にかけて複数件発生したものの，ご担当の先生方及び共通教育係の方々にご協力いただきながら，無事に開講科目を確定するに至った。

### 2) 今後のカリキュラム編成における課題と展望

#### 2-1. 教員数減少と教育目標とのバランスについて

本分科会を構成する人文社会科学部では，共通教育科目を1人で複数コマ担当するなど，後任不補充による教員数減少の影響を大きく受けた担当体制となっている。共通教育が令和6年度より新体制へと移行し，ノルマ制が廃止となることを機に，「人間と文化に関わる領域において，幅広い教養科目を提供する」という本分科会が掲げる教育目標の達成と実際の教員資源とのバランス（また，そのバランスのとりかた）について本格的に議論していくことが今後の喫緊の課題である。

#### 2-2. 物部科目について

本分科会では，毎年2コマを物部科目として開講している。本科目については，従来の対面授業だけでなく，オンライン形式の開講も可となっている（ここ数年間は後者の形式の授業が主となっている）。同時に，近年ではメディア科目の普及など，授業に多様性をもたせる取り組みが共通教育によって進められており，学生のキャンパス間移動の必要性自体が以前よりも低くなっている。このような物部科目の現状と共通教育における授業形式の多

様化を考え合わせると、「物部科目」として授業を開講することのメリットが次第に無くなってきているともいえ、したがって物部科目の開講については再検討の時期にさしかかっていると考えられる。共通教育の新体制への移行も見据えながら、来年度はこの点についても分科会内でさらに議論していく必要があるだろう。

### 2-3. 自己点検・自己評価部会及びFD部会との連携活動について

現在、本分科会の自己点検・自己評価部会では、授業の質保証の観点から「公正な成績評価」がなされているかどうかを分析・確認する作業を行っている。またFD部会では、教育に関する学びを促進するためのFD開催や、アンケート調査による分析などを実施している。これらの取り組みは教育の質向上に大きく貢献しており、有意義な活動として評価される一方で、毎年のカリキュラム編成との結び付きはあまり意識されていない。したがって、自己点検・自己評価部会やFD部会で得られた分析結果・知見をカリキュラム編成にも活かすことができれば、学生と教員の双方にとってのメリットになるのではないだろうか。しかし、人文領域の学問の性質上、教育場面での即時的効果ばかりを意識したカリキュラム編成は、かえって学問の本質からの逸脱や偏った授業展開をもたらす恐れもある。よって、まずは「カリキュラム編成と他部会活動との連携」という視点を新たにもつことが大切であると考える。

### 3) その他

令和6年度(再来年度)からの新体制に向けた開講科目の検討要請を受け、開講科目数や科目名等について分科会で議論した(「芸術」分野、センター等は除く)。12月末に、計14科目(人文社会科学部11科目、教育学部3科目)から成る開講科目リスト(最終版)を作成・提出した。

### 4) 総括

年度始めに作成した活動計画書に概ね沿うかたちで円滑なカリキュラム編成を行うことができた。また、今年度の諸活動を通して、今後も継続して議論が必要な課題、また新たに検討すべき課題が明確化されたため(「2) 今後のカリキュラム編成における課題と展望」を参照)、これらの問題に対して積極的に取り組んでいく必要があるだろう。再来年度(令和6年度)の共通教育の新体制に向けて、本分科会の位置づけ・役割を再確認しながら、学生及び教員の双方にとってプラスとなるような建設的なカリキュラム編成を目指していきたい。

本報告では、自己点検・評価作業の一環として、授業の質保証という観点から令和4年度の本分野における授業の成績評価において、学士課程運営委員会「公正な成績評価の実施に向けて（申合せ）」に見える「優以上の成績を修める学生の比率は、半分以下を標準とする」という目安がどの程度貫徹しているか、現状をまずは確認する。こうした比率の設定は、たとえば野放図な「優の乱発」などに歯止めをかけるなど、成績の質保証の観点から要請されたものであると考えられるが、もとより現場の状況は様々であり、こうした点から「少人数の実技系授業はその例外とする」などの配慮もなされている。その上でこうした目安から「逸脱」した事例の具体的な状況を知ることが、その有効性や課題を探る上でも有効な試みであるといえよう。そこで以下では、そのような事例での状況についてもあわせて簡単に紹介することとしたい。

令和5年度の共通教育人文分野では、33科目の授業が開講された。全学共通教育係から提供された資料をもとに確認した結果、優以上の成績を修める学生の比率が半分以上の授業は、9科目（人文社会科学2（非常勤1を含む）、教育7）であった。そのうち申し合わせの例外対象となる少人数の実技系授業は6科目であり、したがって、開講授業の9割以上が申し合わせに示された目安の範囲内におさまる成績評価を行っていたことになる。

例外対象とならない3科目について、それぞれ授業担当者に事情を問い合わせたところ、うち2科目については

授業の一部で取り入れる作業などの構成上の関係で、配点のバランスを取るのが難しい

あるいは

正誤問題形式にしたところ予想外に正答率が高く、その結果をくつがえすわけにはいかなかった。学生のモチベーションも実際高く、それもこうした評価の背景となっている

とのことであり、少人数ではない（38受講）ものの実技系1科目では、

- ・受講者の提出する毎回の課題では、各自が鋭い分析と考察に基づき、提出した
- ・毎回提出された課題内容から、鋭い分析をピックアップし、Kulasメールで全員に送ることで、受講者間で意見を共有できた（非対面のため工夫した取り組みで、受講者に好評であった）

との回答を得た。

参考までに「例外対象」である少人数実技系授業6科目の担当者にも聞き取りを行った結果、

- ・総じて履修生が優秀で、授業(実技)への取組も積極的であったため。
- ・今年度の履修生は、経験はそれぞれであったが、感がよく、最終の演奏発表でもしっかり演奏できていた。
- ・学生達は授業と課題に熱心に取り組み、制作した作品を展覧会として展示し、質の

高い成果発表となり、全体として高い成績となった。

- ・最終の演奏発表会では出場者全員が立派な演奏ができていたこと。授業の中（個別レッスン含む）で指摘した点は、全員が修正して臨んでいたこと。
- ・知識も経験も様々な学生が混在しているため、専門的な知識・技能がなくても極端に低い評価を下すことはない。しかし、成績評価において「優」以上は14名中7名と半数であるが、95点の「秀」の学生1名以外は、85点が最高点である。このことから、素養のない学生についての配慮は行いつつも、厳格な評価を下していると言える。
- ・授業中の教員と学生の双方向のやりとりまたは学生同士のディスカッションなどで適切に学生たちの学びを深める取組を行っている。よって出席日数等で問題がない限り受講生の評価は高いものとなっている。

との回答が得られた。

以上に見てきたように、本分野においてはその9割以上が成績評価の目安におさまっており、それ以外の「逸脱」事例（あるいは例外対象である少人数実技系授業の例）についても、総じて担当者それぞれの厳正な基準のもと、受講生の取り組みなり成果の優秀さが高い評点の割合の増大につながっていた結果であると考えられる。こうした状況は、授業の質保証という観点からするならば、比較的健全なあり方を示していると見ることはできるのではなかろうか。「授業の仕方を工夫して、その結果として多くの学生が高い成績をおさめる」という望ましいあり方と、「成績評価が偏らないようにバランスに留意する」という方針とは、なかなか両立は困難のようではあるが、現場の状況に応じて例外対象を設けるなど柔軟な枠組みを維持しつつ、一方では恣意的な評価への自製の契機として機能することによって、授業の質保証の一助となることが期待される。

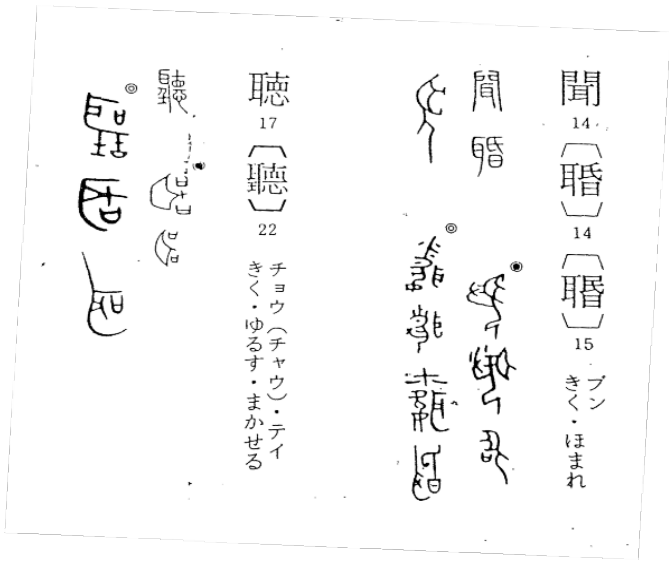
領域横断的な研究・教育の楽しみ

2023年2月15日(水) 14:00~16:00に、音楽学者の中川眞氏(大阪公立大学都市科学・防災センター、特任教授)を外部講師として招き、人文分野分科会のFD研修を実施しました。講演内容は、大学教育の内容や方法の改善を図るというFDの意義を踏まえ、領域を横断していくことの面白さや必要性を認識させるため、「領域横断的な研究・教育の楽しみ」と設定しました。ここでは、中川氏の講演内容を中心に報告します。

中川氏の研究を概観すると、大別には5つ(サウンドスケープ&サウンドアート、東南アジアの儀礼文化、社会包摂型アーツマネジメント、奈良県の民俗芸能、ガムラン音楽)の考察視座があると整理できます。中川氏は、もともと音楽学では王道ともいえるベートーヴェンの研究者でありましたが、インドネシアのガムランの音楽世界と出会って、シフトの転換があったそうです。彼は、「隙間」の意味するニッチ戦略を基本としており、誰もやっていない研究や困難な状況にある人々の声に注

目し、アートを活用した新たな表現法や価値を創造する活動をおこなっています。今現在もニッチ戦略により研究を続けています。

さて、皆さんは「きく」という漢字の成り立ちを知っていますか。真ん中の人、何をきこうとしているのでしょうか。それは、響いてくる神の声をきくというのが「聞」の原義であり、より能動的・意図的にきこうとする様子を表すのが「聴」であるといいます。いずれも、「聞・聴」という漢字の原点にあるのは、そこら辺にある大きな音を捉えることではなく、きこえないほど小さな音をも捉えることです。



たとえば、インドネシアのガムラン音楽は、一般的に野外で行われますが、周りには様々な音(鳥の鳴き声、風の音、雨の音、人々の喋り声など)と無関係でなく、それらと相互浸透的な融和をつくり出す音の世界です。実は、教育学部音楽棟にもガムラン室があり、共通教育科目「ガムラン演奏基礎演習」を設けていますが、いつも室内で実施しているため、音環境を意識し、より豊かな音楽表現を追求したことはありません。今後、自然と調和した音の世界を体験するためにも、ガムランの本来の姿を取り戻してあげたいと思いました。中川氏の研究には、こうした音を聴く行為によって環境を把握し、人と自然との関係性の再考するサウンドスケープ(音環境)の視点がその根底にあるといえます。

その他の研究として、過疎地域の芸能の伝承問題に焦点を当てた奈良県十津川村の盆踊りの研究や大阪の日雇い労働者の町として知られる釜ヶ崎の紙芝居劇むすびの活動、部落差別として知られる京都市東南部崇仁地区や東九条における芸術活動など、「弱さ」「小ささ」などをキーワードとし

て、社会包摂の現場でアートが果たす役割、意味、限界などの議論を行い、社会とアートの関係について深く省察していることがわかりました。

今回のFD研修からは、以下の2つが示唆されました。

一つ目は、研究におけるニッチ戦略です。中川氏は、障害・孤独・LGBTQ・被災・病・貧困・過疎など「誰も知らない、知ろうとしない」社会的空間を研究の対象としており、自分ならではのニッチ分野を開拓して、独自の方法で活躍していることです。



二つ目は、自分の研究結果がどのように社会還元できるのか、いわゆるフィールドバックを絶えず意識し続ける研究活動をおこなっていることです。そのためには、公平な関係性をもってコミュニティの中に入ってゆくことが重要であり、(独りよがりにならず)市民との協働による取組みが必要であることがわかりました。

さっそく、自己満足の研究より、世のため人のためのなる研究とは何か、自分の専門分野でまだ誰もやっていない研究は何かを探してみたいと思いました。

講演の中で紹介された下記の詩は、中川氏の活動理念と共鳴する部分が多く、研究の根底になると言われています。最後に、山崎佳代子の詩を提示して報告書を締めくくります。

人と人のめぐりあい、つながりこそが、目に見えない小さな力、しかし、それだからこそ内なる世界を少しずつ変える力になるのではないだろうか。この小さな力さえあれば、様々な土地にきざまれた記憶の豊かさに触れ、命の重さの等しさを感じ取り、自然の力の深さを確かめ合うことができる。生活というささやかな営みにひそむ、無数の小さな力が結び合うとき、なにかを変えることができる。

(山崎佳代子 2014)

諸事情によりFD研修に参加できなかった方々のため、中川氏が関わっているプロジェクトのURLを下記に添付します。

ミカノハラ・ガムランプロジェクト:<https://www.youtube.com/watch?v=gpPAMbUCXWo>

紙芝居劇団むすび:<https://www.youtube.com/watch?v=-jnwyXDYEB4>

奈良県吉野郡十津川村盆踊り:[https://www.youtube.com/watch?v=nmZC8C2Ei\\_A](https://www.youtube.com/watch?v=nmZC8C2Ei_A)

さあトーマス:<https://10.gigafile.nu/0220-r327815fdb6614bba89b19fde92457986>

阪神虎舞:<https://www.youtube.com/watch?v=pHaILOgR0ik>

京都市南区東九条ダンス:<https://10.gigafile.nu/0220-d70e2e13c28e46a3412e20ad25c7ea571>

大阪市大病院・花村:<https://www.youtube.com/watch?v=UJSDt8C-bJM>

松永通温「Waves」:<https://83.gigafile.nu/0514-ed80e4de68de45876a39c2e15ba78761a>

中川真「非在の声」:[https://www.youtube.com/watch?v=u\\_j2HOWVDRM](https://www.youtube.com/watch?v=u_j2HOWVDRM)

釜ヶ崎ガムラン:<https://www.youtube.com/watch?v=TBzbaczAY6Y>

## 5 社会分野分科会

令和4年度 社会分野分科会・カリキュラム編成に関する報告

社会分野分科会長  
岡田健一郎（人文社会科学部）

### ◆カリキュラム編成

#### 1. カリキュラム編成の経過（令和4年10月～令和5年1月）

基本開講数47コマについて、人文20、教育6、地域協働21（他分野を含む）と決定した。社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部に次年度担当体制について依頼をし、担当者および時間割を調整・決定した。また、別途センター所属教員に次年度担当体制について依頼を行い、時間割を調整・決定して頂いた。

令和5年度のカリキュラム編成においては、社会分野が担うべき基本開講数47コマの他に、各学部等の協力を得て多様な科目のカリキュラムを編成できた。

#### 2. 令和5年度カリキュラム編成のポイント

(1) 物部キャンパス開講科目については、令和2年度以降、人文社会科学部1題目、地域協働学部が1題目開講することとなっている。なお、令和2年度においては、コロナ禍に伴う措置としてオンライン授業での開講となったが、令和5年度も引き続きオンライン授業とすることが確認された。

### ◆自己点検・評価活動

ここ数年、授業アンケートについては、KULASやmoodle等、実施形態が多様化しており、実施結果についての把握が難しくなっている。この点については、早急な対応や実施に対する共通理解が求められるかもしれない。なお、次年度のシラバスチェックを実施している。

### ◆FD活動

令和4年度は独自のFD企画は行わず、必要に応じて他分科会などのFDに参加した。

### ◆その他

社会分野については、基本開講コマ数につき、今年度は人文社会科学部において学部内調整が行われた。また、前述の通り物部開講科目につき、令和5年度も引き続きオンライン授業とすることが確認された。



## 6 自然分野分科会

自然分野分科会会長 加藤 治一（理工学部）

### 1. 自然分野分科会の運営体制

本年度の自然分野の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識、方法および思考法を習得し、それらを基盤とした自発的な探求力、深い洞察力および論理的な思考力を育成する」ことである。これを実現するために、自己点検評価活動やFDとも連動して、カリキュラム等編成に関する課題を点検し、編成作業を進めてきた。なお、分科会委員への情報周知や協議・作業依頼に関しては、原則としてメール会議で実施した。

本年度の自然分野分科会は次に示す13名の委員で構成される。FD担当の分科会副会長には農林海洋学部の守口海委員が、自己点検評価担当の分科会副会長には教育学部の西脇芳典委員が選出された。

#### 【自然分野分科会委員】

分科会会長：加藤治一、分科会副会長（FD 担当）：守口海、分科会副会長（自己点検評価担当）：西脇芳典

その他の委員：加納理成（教育学部）、小野寺栄治・仲野英司・小崎大輔・岡本達哉・川畑博・老川稔（理工学部）、関安孝（医学部）、加藤伸一郎・小河脩平（農林海洋科学部）

### 2. 令和5年度カリキュラム等編成

令和5年度のカリキュラム等編成は、次のような手続きで行われた。第1回カリキュラム等編成部会（7月6日開催）において、人事ポイントの変化に応じて各学部への担当コマ数が割り振られた。自然分野に関していうと、理工学部は4減の42、教育学部・農林海洋学部は前年度から変化無し（それぞれ5、12）の案が提示された。各学部に関わせたところ当分野に関する異存はなく、第2回カリキュラム編成部会（10/14）・第3回共通教育実施委員会（10/26）を経て、原案どおり令和5年度の自然分野の担当コマ数を教育学部が5、理工学部が42、農林海洋学部が12とすることが承認された。この担当体制に基づき令和5年度のカリキュラム等編成作業を開始した。センター教員が担当する科目は、第3回共通教育実施委員会（10/26）を経て別途依頼された。編成された科目は第3回カリキュラム編成部会（1/13）に提出され、原案どおり承認された。

本年度からの主な変更点は以下の通りである。

#### 【新規開講】

なし

#### 【廃止】

・単細胞生物のはなし

・ 遺伝資源の利用と保全

【開講時限変更】

トポロジーと囲碁 木2→水1

【科目名変更（英語名）】

※旧共通専門科目のうち植物育種学Ⅰの英語科目名を「Plant BreedingⅠ」に

【担当教員の変更】

物質の科学、生物学入門、地球科学入門、フードサイエンスの世界、海洋を考える、地球の農林資源と海洋科学、土佐の自然と農林業、ライフサイエンスの世界、社会を変えた化学・生物学（いずれもオムニバス科目で担当教員の一部変更）

※旧共通専門科目のうち、理工系微分積分学、生物学概論Ⅰ、基礎生物学実験、化学概論も担当教員の変更

R6年度からはノルマ制の廃止が予定されている。分科会長は共通教育主管と8/24に面談し、改変に先立ってR6年度共通教育開講科目の予定数（概数）を検討しておくよう依頼を受けた。現在の分科会メンバーを中心に自然科学系領域科目検討グループを立ち上げ、メンバー及び理工学部・教育学部・農林海洋学部の学務委員長などと連絡をとりながら10/31に回答書を提出した。回答が全学的に検討されその後、他領域の分科会長とともに共通教育主管と再び面談を受けた（12/2）。そこでは全学教育機構長名の文章が提示され、開設科目数等について現行の開講科目を維持することなどを再検討して欲しい旨の依頼を受け取った。再び各学部と連絡をとりながら学部・実働教員の内情について調査を行い、12/28に再回答書を提出した。回答書自体は内部文章であるのでここには記載しないが、現段階ではR6の開講科目として理工学部18科目・農林海洋学部9科目・教育学部5科目が開講可能であることを改めて報告した。全学教育機構長がだした2/27付の「再編後の共通教育教養科目開設科目数等について」では、「再編後の自然科学領域の開講予定科目数として、現在の提案数を目安とすることを了承したい。」との記載があり、当科目検討グループからの提案は基本的に認められたようである。実施にあたっての詳細については、来年度再びの検討に託したい。

### 3. 自己点検・自己評価

内部質保証体制の構築に関連し、第1回共通教育自己点検・自己評価部会（1/18）にて各部会に対し、昨年度に引き続いてシラバスチェックを実施するよう依頼があった。自然分科会では、自己点検・自己評価担当の副分科会長（西脇）が担当し、いくつかの科目のシラバスについて不備を自己点検・自己評価部会に報告した。なお、本年度のシラバスチェックは西脇先生が一手に担っていただく形になり、負担が集中した。分科会としての体制作りとともに、教員が行う業務の検討・精選やその効率化が必要であると考えます。

#### 4. FD 活動

自己点検・自己評価の項にあるような内部質保証体制の構築について委員間で意見交換を行った。コロナ禍の影響もあり、本年度は自然分野分科会として独自の FD 講演会などは開催しなかった。

#### 5. その他

内部質保証体制に基づき、令和 4 年度の成績評価分布について分析を行っている。（3 月現在）

## 7 医療・スポーツ科学分科会

### 令和4年度 医療・スポーツ分科会 活動報告書

#### 【カリキュラム編成部会】

宮本隆信（教育学部）

#### 1 開講数

令和4年開講科目は、表1の通りであった。具体的には、講義10のうちスポーツ科学講義3、健康4、医療3であった。実技科目は、朝倉15（集中2）、物部2であったが、物部1は受講生がおらず、開講せずとなった。

	第1学期	第1学期集中	第2学期	総計	前年増減
講義	6(6)	-	4(3)	10(9)	-1
実技	5	2	10	16	-1
<b>総計</b>	<b>11</b>	<b>2</b>	<b>13</b>	<b>26</b>	<b>-2</b>

#### 2 受講生総数

各科目の受講生は、表2、表3の通りであった。講義科目は、1、2学期あわせて1229名（昨年比+176）が受講し、科目平均は122名であった。講義科目はほとんどがオンラインでの開講となったが、最大198名、平均受講数127.3名となっていた。

	第1学期	第1学期集中	第2学期	総計	前年増減
講義	764	-	465	1229	176
実技	159	34	176	369	12
<b>総計</b>	<b>923</b>	<b>34</b>	<b>641</b>	<b>1598</b>	<b>188</b>

	第1学期	第1学期集中	第2学期	総計	前年増減
講義	127.3	-	116.3	122.9	17.6
実技	31.8	17.0	19.6	23.1	0.75
<b>総計</b>	<b>83.9</b>	<b>17.0</b>	<b>49.3</b>	<b>61.5</b>	<b>7.23</b>

講義	197 (53)	-	198 (43)		
実技	47 (14)	28 (6)	36 (0)		

また実技科目については、科目平均23名となっているが、最大では、47名であった。実技科目の受講生については、北体育館、南体育館、テニスコートなど広さの関係から受け入れる受講生を制限しなくてはならないことやコロナ感染症対策から通常以上に受講生を制限しなくてはならないことから現状の数字となっている。また実技希望者すべてを受け入れることができていないのも現状である。

#### 3 まとめ

令和4年度医療スポーツ分科会カリキュラム編成部会として、開講科目は、1、2学期、講義、実技例年通りバランスよく配置できていた。

また受講生数については、講義科目平均127名、実技科目平均23名となっており、一定の需要が見込まれている。ただし、実技科目については、実施場所の広さなどの問題から昨年に引き続き、受講希望者全員の受講には至っていない。

次年度に向けて、講義科目、実技科目の維持に努めながら、受講学生の希望に添えるカリキュラムの編成を考えていく。

## 【自己点検・評価部会】

生命・医療分科会自己点検・評価部会 吉村澄佳（医学部）

### 1. 令和4年度「健康」

本年度の「健康」の授業は新型コロナ感染予防のため、昨年度同様に非対面授業での開講であった。A-Dの4クラスでの授業後に、履修学生を対象として1学期に授業評価アンケートを実施した。質問内容は、学部、学年、性別、授業内容の評価12項目と授業を受けて自身への影響3項目の計15項目、および自由記載である。回答数はAクラス：98人、Bクラス：43人、Cクラス：54人、Dクラス：82人、計277人であった。

#### 1) 回答者の特徴

アンケート回答者の所属する学部別にA-Dの受講クラスを示す（表1）。回答者数はクラスにより学部に偏りがあった。回答者は1年生が最も多く126人(72%)であった。受講生の男女比は、ほぼ同等であった。

表1. 学部別・クラス別の回答者数

	A	B	C	D
総回答者数	98	43	54	82
学部				
人文	34	15	12	12
教育	5	1	2	8
理工	10	9	13	25
農	23	10	0	1
地域協働	0	1	0	17
医	26	7	27	19
TSP	0	0	0	0

#### 2) クラス別授業評価15項目の結果

評価指標15項目の結果をクラス別に示す（図1）。項目1-12は授業内容に関する項目であり、項目1-7は教員の準備状況や取り組みに関する内容、項目8-12は学生の授業への関心や満足に関する内容である。項目A-Cは授業による学生への影響を問う内容である。

項目1-12のいずれにおいても、A,C,D各クラスでの大きな隔たりはなかった。項目1-7の教員の取り組みは平均点が1項目（項目6）を除いて4点以上であり、昨年同様に高い評価であった。項目6「教員は、受講生が質問や意見を述べる機会をつくりそれらに答えているか」の回答は、例年他項目に比して学生評価が低い。学生の理解度の評価や効果的な意見交換の方法を検討することは引き続き非対面授業での課題である。項目8-12の学生の授業への関心や満足の質問においては、学生の準備状況を除いて平均得点は高かった。一方、クラスBは教員が受講生の質問に答える環境にあった（項目6）ものの、興味・関心（項目10）が他クラスよりも低かった。しかし、授業での健康への知識が得られ（項目11）、授業満足度（項目12）は高く、健康意識の向上につながっているものと考えられる。

授業内容が学生に及ぼす影響についての質問項目A-Cは、各クラスとも高い評価であった。受講学生は「健康」を受講することで健康への理解を深め、学生自らの健康を振り返り、今後の生活の参考にしようと考えていることが明らかとなった。

以上の結果から、本授業は健康に関する話題を各分野の講師から学び、学生が健康についての多角的な捉えや知識を得る機会であったと考える。

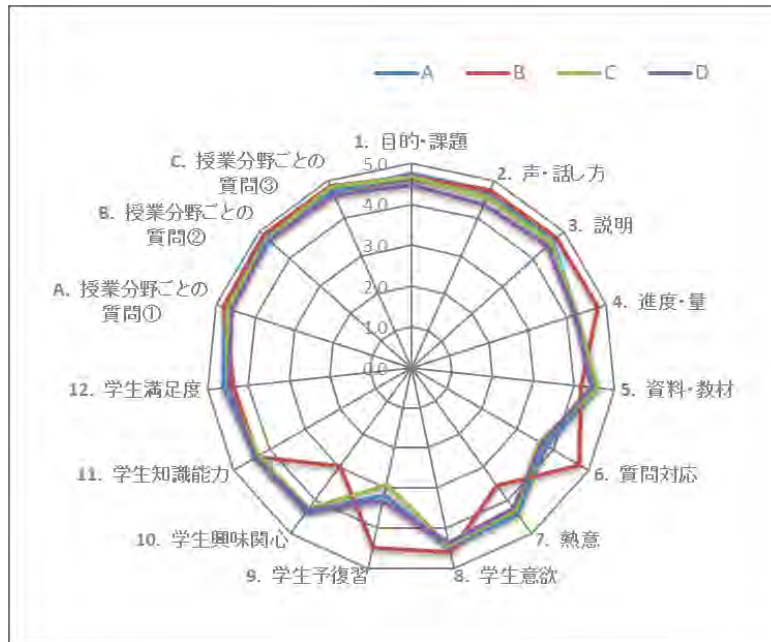


図 1. クラス別による授業評価 15 項目の得点結果

### 3) 自由記載結果のまとめ

自由記載への回答は 99 件であった。授業内容から、[自分の健康について考える機会となった]、[一人暮らしで食生活が乱れだしていたところだった]、[多角的な視点で健康を捉えられた]、[今後起こり得る健康問題への対策と解決方法が学べた]、などの記載があった。健康に関する多くの知識を得て、自身の健康を振り返り改善の必要性や、今後の健康を維持する実践方法を学んでいた。更に、[健康は生涯に関わることなので学べてよかった]、[健康について知ることで生活がより豊かになる]、[知らない考え方や言葉を多く知れた]との記載があった。このことから、今後、学生が健康に関する情報を自ら集め意識を高く持つことや、健康を生活の一部として捉えることができるなど長期的な影響が期待できる。

また、精神衛生に関する知識やストレス対処の講義については例年関心をもつ学生が多い。授業を通して心の管理、他者との関わり方など、メンタルヘルスについて学ぶ貴重な時間であったと考える。

授業方法についての記載として、[動画が工夫されていた]、[スライドが見やすかった]、[課題が明確で対応しやすかった]などであった。一部、[数分しかない授業であった]、[動画だけの授業は資料等が欲しい]との意見があった。

### 4) まとめ

本年度は昨年に引き続きコロナ感染予防のため非対面での授業開講であった。しかし、各クラスとも学生は健康への理解を深め、改めて自身の健康を考える機会とし今後の生活に活かしていこうと考えていた。よって、学生の健康に対する認識を高め、疾病を回避し健康に生活するための予防行動や対処行動につながることを期待できる。

## 【FD 部会】

医療・スポーツ分科会 FD 部会 幸 篤武（教育学部）

### 1. FD 部会報告

令和 5 年 1 月 20 日にスポーツ科学実技「バドミントン」（清原泰治先生）の授業について、分科会長が授業参観（ピア・レビュー）を行い、FD 活動を行った。

授業では、授業全体係計画では、終盤を迎えまともに向かう位置づけの授業であった。授業概要として、担当教員（清原先生）が参加者の出席確認をした後、授業で分けられたグループ（6）がそれぞれでウォーミングアップ、基礎練習などを自律的に実施していた。一定時間後に、グループ対抗のゲームに移行するが、ここでも教師の指示は少なく、受講生がどのように動くか、理解しており、スムーズに場所移動、ゲーム準備が行われ、ゲームが始まった。ゲームは、グループ対抗であり、バドミントンの試合形式であるシングル、ダブルスを組み合わせた形でグループ対抗として実施していた。このことは、グループ内でバドミントンのシングル、ダブルスの異なるゲームを同時に学べるように組まれたものであった。

授業全体を通して、学生の自律的活動が中心であり、活動時間も全体時間の中でも十分確保されるものであった。グループ内で自然と教えあい活動が始まり、スポーツ活動を通しての学びがあるものであった。

学部、学年、性別、スポーツ経験さまざまな学生が受講する中で、グループ活動を学びの中心にし、学生の自律的学習を促していた。この授業スタイルは、生涯スポーツの実施をめざした豊かなスポーツライフを実践していくのに重要なことであることを再確認した。これらを部会で共有していくことでスポーツ科学実技を充実させていくことであると感じた。

## 8 外国語分科会

令和4年度共通教育活動報告書（外国語分科会）

外国語分科会長 西尾美穂

### 1. カリキュラム編成

本年度も「R5 担当体制基本案」による人文社会科学部の外国語分野のノルマ 87 コマを超えて 96 コマの開講を要請され、これを受諾した。現在、人文社会科学部の外国語担当教員は、全員が年間 4 コマ以上の外国語の授業を開講している。これは、外国語担当教員だけでなく人文社会科学部全体としても専任教員の人数が減少し、専門教育や校務の負担が増している中で、非常な負担となっている。また、非常勤講師の確保も地域的な理由や予算の削減などから楽観できない。数年後には現状の体制を維持することが不可能になるため、FD の項にもあるように、令和 6 年度以降の共通教育再編に向けて外国語分野も検討を始めた。教育のレベルを維持しつつ、教員の過剰な負担を解消するため、時間数と手厚い指導が必要な部分では現状を維持しつつ、自律的な学修へ移行していくことが望ましい部分ではオンライン教材を導入するなどの方策が考えられている。

### 2. 自己点検評価活動

副分科会長 高橋俊

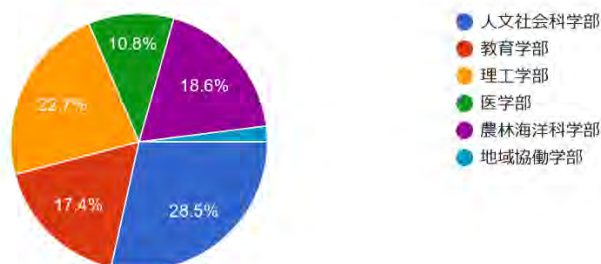
共通教育外国語分科会自己点検評価部会では、本年度より期末試験終了後に受講生へのアンケートを実施し、1,309 件の回答があった。以下、気づいた点を挙げていく。

- ・思いの外、回答数があり、評価も予想より高めであった。
- ・個別のコメントも、ほとんどが好意的なものであった。
- ・設問において、あえていえば、シラバスについて、相対的にやや厳しい評価だったと思われる。

今後も継続してアンケートをとり、授業の改善に役立てていく予定である。

あなたの所属を下記から選んでください。

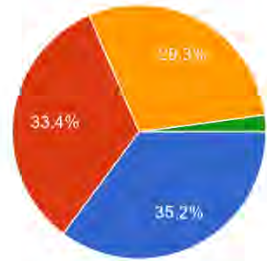
1,309 件の回答





問1 あなたが受講した授業（このアンケートの対象となる授業）は次のどれですか。

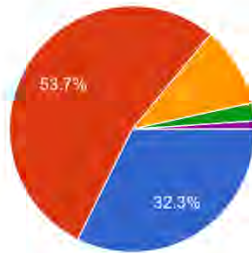
1,310 件の回答



- 大学英語入門
- 英会話
- 初修外国語（ドイツ語、フランス語、...）
- それ以外（TOEIC英語等）

問2 シラバスの到達目標は達成できましたか。

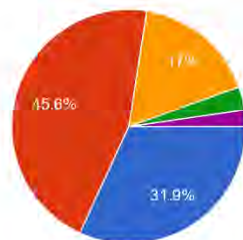
1,309 件の回答



- きちんと達成できた
- やや達成できた
- どちらともいえない
- あまり達成できなかった
- まったく達成できなかった

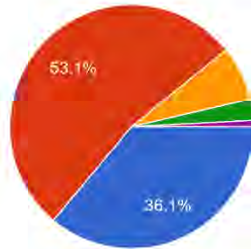
問3 シラバスは授業の履修に役に立ちましたか。

1,309 件の回答



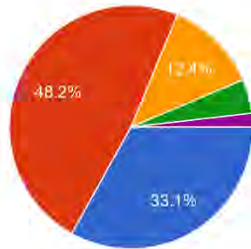
- とても役に立った
- やや役に立った
- どちらともいえない
- あまり役に立たなかった
- まったく役に立たなかった

問4 授業はどのくらい理解できましたか。  
1,308 件の回答



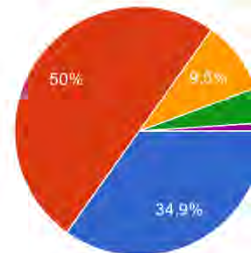
- ほとんど理解できた
- おおむね理解できた
- どちらともいえない
- あまり理解できなかった
- まったく理解できなかった

問5 受講した外国語への学習意欲は高まりましたか。  
1,306 件の回答



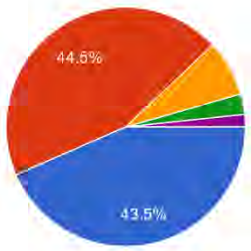
- とても高まった
- やや高まった
- どちらともいえない
- あまり高まらなかった
- まったく高まらなかった

問6 授業の難易度は適切でしたか。  
1,308 件の回答



- きわめて適切だった
- 適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切ではなかった
- まったく適切ではなかった

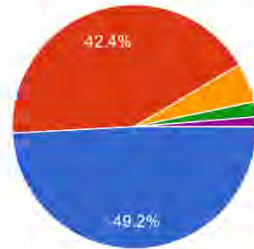
問7 この授業に満足しましたか。  
1,307 件の回答



- とても満足した
- おおむね満足した
- どちらともいえない
- あまり満足しなかった
- まったく満足しなかった

問8 授業の進度は適切でしたか。

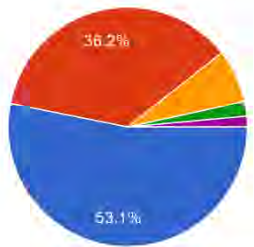
1,308 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問9 教科書や配布資料の使われ方は適切でしたか。

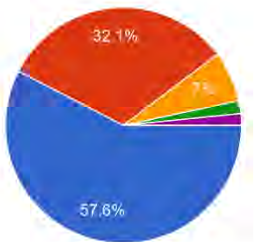
1,308 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問10 教員の話し方は適切でしたか。

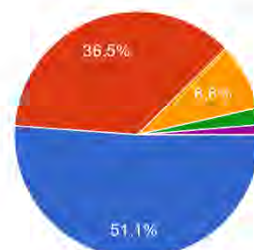
1,308 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問11 板書や資料提示は適切でしたか。

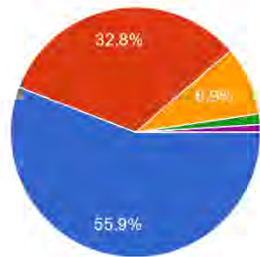
1,306 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問12 意見や質問への対応は適切でしたか。

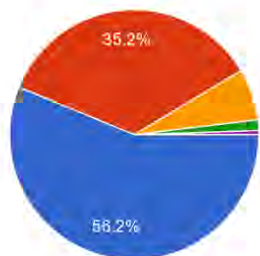
1,303 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問13 教員は熱意をもって授業に取り組んでいましたか。

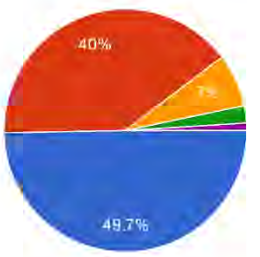
1,304 件の回答



- とても熱意をもって
- 熱意をもって
- どちらともいえない
- あまり熱意をもっていなかった
- まったく熱意をもっていなかった

問14 中間試験や期末試験の出題内容は適切でしたか。

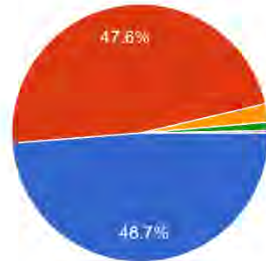
1,306 件の回答



- とても適切だった
- 適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切ではなかった
- まったく適切ではなかった

問15 授業にどの程度出席しましたか。

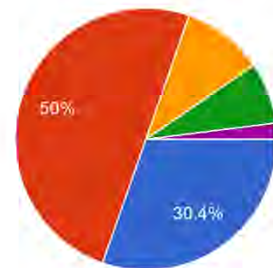
1,309 件の回答



- すべて出席した
- おおむね出席した
- どちらともいえない
- あまり出席しなかった
- まったく出席しなかった

問16 受講した言語に関して自己学習（授業の予...試験準備以外の学習）をどの程度行いましたか。

1,307 件の回答



- 努力して自己学習に励んだ
- 多少自己学習に取り組んだ
- どちらともいえない
- あまり自己学習はしなかった
- まったく自己学習はしなかった

コメント

楽しく学ぶことができた。

英会話ではいろんな人と話すことが必要であり大切であると感じた。

ついていくために自分で努力して勉強を行えてよかった。

問題集や配布してくださるプリントが非常に良かった。

自分にとってはとてもやりやすい授業だった

自分自身が望んでいる英語教育とは少し違ったものの内容にしても授業方法にしても面白いものだった。

英語を話せる機会ができて良かったです。

長谷川先生の授業は学生にやる気を出させる力があつた。

楽しい授業でした！！

急遽とは言え一学期と二学期で教員を変えるのは良くないと思います

ストラテジーを使った skit をグループごとに発表する授業でしたが、とても楽しく英語を学べた。

英文を多く読んだので、そこで英語以外の新たな知識を得ることが出来た。

課題が人によって難しすぎるように感じた

英会話自体は必修以外でも履修できたら良いと思う

教員の指示が分からない時があった

高校のときに学んだ英語の復習にもなってよかった。

発音が難しかったが、徐々に慣れていき知識が深まっていく感覚が嬉しかった。

教員の話が少しわかりづらかった

授業の進度や難易度、教員の説明など、さまざまな点において適切であり、今後の外国語活動に対する意欲が高まった。

ペアやグループで話す機会が多く設けられており、1人で自己学習するよりも更に学びを深めることができた。この授業で得た知識を今後の外国語活動に活かしていきたいと思う。

楽しい授業だった

全て英語でよく分からなかった。

慣れない第二外国語を学ぶ上で、多少不安があったものの、教員の熱意や適切な話し方によって学習に対する意欲が高まり、進んで自己学習に励むことができた。

細かいアドバイスをしてくれたので、会話力が自然なものになった。

生徒と教員の間で密に質問することができた

興味を持ってない授業だった。評価の仕方が理解できなかった。この先生の授業をもう一度取ることはない。

英文の基礎となる部分を学べた。

フランス語を勉強しようと思いました。

楽しい授業だった。教室が寒かった。

スペイン語ムズすぎて草

楽しかったのでまた参加したいです

自己学習で補う場面が多く、授業は全く役に立たなかった。シラバスも記入されてなく、板書も少ない授業で、教科書もほぼ使わなかったので授業で理解したことは少なかった。

授業を通して自分自身の英語に対する勉強の意欲が高まりました。ありがとうございました。

授業時間があつという間に感じる授業だった

他の学生たちとグループワークを通して英語で会話をする大切さと難しさを学べる授業だった

ドイツ語に触れていろいろなことを理解できました。

先生の説明が分かりやすく丁寧で、授業の理解を深めることができました。本当にありがとうございました。

第二言語を学習することの重要性を理解できた。

グループワークが多く授業を楽しく取り組めたので積極的に授業に参加することができた。

試験では良い評価を得ることができたので良かった。

授業内容や試験は難易度を高く感じたけれど、今まで英語以外の外国語を時間をとり学習

することがなく、新しい知識を授業を通して多く学ぶことができたので良い経験ができたと感じました。

この授業で、知らなかった熟語や使い方を学ぶことができて満足している。私は、英語が苦手であり好きではないが、友達と意見交換して自分がわからないことも、理解できるようにしてくれたので良かった。

塩見先生の元でドイツ語が勉強できて本当によかったです！

教科書の文章を和訳する際には、単語や文法を改めて学ぶことができたので良かった。また、教科書の内容が、新たな知識となったので良かった。

英語が好きになれた

レベルが高すぎて、みんなについて行くのがかなり大変だった

初めて中国語を勉強し、きちんと理解できるかどうか不安だったが、先生がわからないところや難しいところを丁寧に教えてくれたのできちんと理解ができた。また、1課、2課と課が終わるごとにそこで出てきた単語のテストをしてくれたので、中国語を覚えることに慣れることができ、中間・期末テストでは、さほど苦勞せず受けることができた。授業の中では、中国のことも教えてくれたので、より中国に興味を持つことができ、勉強に励むことができた。

先生が優しくて好きになった

質問などとても丁寧に対応してくださったので、学習意欲に繋がった。

楽しく学ぶことが出来た

先生との相性が良かった。

丁寧にしてくれて、良かったです

先生が質問に丁寧に答えてくださり、親切だった。

小テストの問題で、本文を載せずに教科書に載っている問題を出していたために、一部英語力というより暗記力を鍛えるようになっていたのではないかと少し気になりました。

欠席した生徒を授業中に笑いのネタにしている言動はいかがなものでしょうか。〇〇先生。とても楽しい授業でした。

仲間との交流が多かったため、楽しんで授業を受けることができたと思います。

適切な授業だと思いました。

意欲的に取り組める授業でした。

個人学習とグループワークのバランスが良く、充実した授業だった

英語への関心が深まりよかったです。

英語を勉強しようと思うことができた

中国語に興味を持ってました。

英語以外の外国語に興味を持つことができてよかったです。

世界の文化を知ることが出来ました。

楽しい授業でした。

対面であればより良かった。

積極的にクラスメイトや先生とコミュニケーションをとる機会があり、自分の伝えたいことを英語で伝える良い練習ができた。

毎回質問に丁寧に答えてくださったので、英語についての理解がより深まった。

適宜プリントを用いた補足の説明や練習問題があったので、授業内容をより理解することができた。

テスト難しかったです

楽しく英語を学ぶことが出来た。

色々な英語の物語を読めて楽しかったです。

1年間つかれた

つかれた

初めての言語で分からないことも多かったです、優しく教えていただいて理解することが出来た。

テストが少し難しかったが、英語に触れる機会が高校に比べて少なくなった自分にとって勉強するいい機会だった。テストでも勉強した成果を活かすことができたのでよかった。意欲的に参加出来たのでよかった。英語を話す能力について高めることができたのでよかったと思う。

なにもわからない自分にとって丁寧に優しく教えてくださったので、理解しやすかった。興味も持つことが出来たのでよかった。

楽しく学習できた。

自分で話すことに重きを置いた授業でとてもやりがいがあった。スピーキング力も前より上がったと思う。

たくさんのことを学ぶことができた。

実際に英語で会話する機会を作っていただけたのはとても良かった。

国際英語の授業で一度も先生と顔を合わすことなく終わった。せめて、授業の動画を貰いたい。PDFの資料だけでは授業の内容が理解しにくい。

とても楽しい授業中でした

ありがとうございます

松吉先生のおかげで英語の勉強頑張ろうと言う気持ちになれましたし、来年も先生の授業を受けたいと思うほど、丁寧に教えてくださりました。講義の時間がとても楽しかったです。

ありがとうございました

ポーラと喋る時間が多く、楽しく英語を学ぶことができた！

英語が苦手な私からすれば、テストではなく、プレゼンなのが嬉しかった。そこで、1人ではなく、チームで協力することで英語以外の力も身につけることができてよかった！

毎回楽しみになるような講義でした。

楽しく外国語を学べたので良かったです。



とてもわかりやすい授業でした  
分かりやすかったです  
楽しく授業ができました  
英語のニュースを見る機会はなかなか無いので、いい授業でした  
楽しい授業で満足しています  
とてもわかりやすく、楽しく受けることのできる授業展開だった。  
先生によって授業の難易度に差があるため、その差を明確にする（難易度をシラバスで示すなど）か、差がないように努めてほしい  
楽しく英語を学ぶことができた  
外国に興味を持てる良い機会になってよかった。  
楽しく会話をして、英語に触れることができた。  
高校で学べてなかったことも学べてよかった。  
わかりやすい授業だった  
学ぶ意欲が増した  
英語を話せる機会があまりなかったがこの授業を通して英語を使った会話について理解を深められた。  
メールに反応が全くなかった。  
難しいけど楽しくできた。  
優しい先生でよかったと思います。英語についてわかりました。  
授業はよかった。  
中国語を履修していて、今後も学習を続けたいと考えているので中国語中級にネイティブの先生がいてほしいと思う。  
楽しく言語と向き合うことができ、さらに学びたいと思わせる授業でした。  
中間テストの回数が多かった。  
グループワークの時間があって楽しかった  
オンデマンド形式だったので取り組みやすかった。今後も続けるべきだと思う。  
英語は苦手な科目ですが、楽しく学ぶことができました。  
分かりやすい授業でした。  
ドイツ語という今まで学んだことのない言語でしたが、楽しく学ぶことができました。  
言語は対面に限ります  
もともと興味があった言語だったのもあって、毎回とても楽しく授業を受けることができた。教科書の内容だけでなく、教員の家族・友人の話や世間で話題になっていることなどいろいろな話を聞いたのもよかった。  
〇〇先生の授業とテストが難しすぎた  
楽しく有意義な授業でした。  
授業形態は良いと思います。教科書を上手く使って授業中に listening、speaking を練習で

きた点も良かったです。

listening の力が 2 学期の英会話でより良くなり良かったです。ネイティブの発音を意識して聞いていたからなのかと思います。

期末試験の出題内容、範囲が説明の度が変わっていてわかりづらかった。また、授業の前日の夕方くらいに課題を提示してきて、できていない人は欠席扱いにするというのはおかしいと思う。授業もわかりにくい点があった。さらに、買った教材を終わらせもせず、途中で使うのをやめたため、非常にもったいないと思った。買わせたなら終わらせてほしい。そして、大学側からプリントの配布は控えるように言われたため、自分で印刷をしてくるように途中でなった。そのプリントも結局最後まで少しも使わないものが多かった。大学側がプリントの配布を控えるようにと決めているのは経費削減や、環境問題を考慮してのことだと考える。しかし、大量に印刷させられ、使わないものも多いため、全く意味がないことをさせられていた。加えて、TOEIC の講座かと思うほど TOEIC の問題を解かされた。最後に、担当教員の好きな洋楽の歌詞を暗記させようとしたり、教員の望む回答をしなかったときに「なめてるの?」と聞いたりして、良くないと思うことがあった。課題の量も他の英語入門の教員との差が大きく感じたため、課題の量はどの授業でも統一するようにしてほしい。

韓国人の先生だったため、韓国語だけでなく、韓国の文化や韓国の状況など、韓国のあらゆる情報も聞くことができたので非常に面白かった。

ドイツについてあまり知らなかったが興味を持つことが出来た。

私は言語を学ぶのが苦手なので、もし必修でなければとっていなかったです。しかし、必修でとる必要があったからこそ多くのことを学びました。

1 年間ありがとうございました！

先生と連絡を取りたいときに、Outlook で先生にメールを送っても返信が来ないのでとても不便だったため、改善していただきたいです。また、授業の連絡も前日の夜中ではなく、せめて日中や 2 日前などにしていただけたほうが、生徒は焦らずに済むので、そこを改善していただきたいなと思いました。

塩見先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。

teams での授業で、通信環境により受講がうまくいかないときがあったので、そのあたりの改善があればいいと思う。

教科書以外で使用した資料が多く、内容が充実していたと思う。

全体的に先生の対応が丁寧であり、快適に受講することができた。

英語の使い方だけでなく、授業で取り扱う内容が興味深いことばかりだったので、授業を受けるのが楽しかった

序業で取り扱った英文の日本語訳を最後にまとめて説明してくれるとより分かりやすかった。

1 学期と比べて教科書以外の内容をする時間は少なかったものの、ドイツに関する様々な

ことを知れて楽しかった。

ドイツ語の発音の誤りをあまり矯正してくれなかった。

教科書の内容をすべて終わらせることができず、授業進度が遅く感じました。発言する機会も少ないため、もう少しスピーキングをする場を設けたらいいのではないかと思います。

課題の提出方法が非常に困難でした。

予習をするのが少し難しかったです。

英語をもっと勉強しようと思いました。

90分飽きのない授業を工夫して行ってくださったおかげで英語力向上の意欲がわき自身で自主学習に取り組むことができた。

先生がとても優しくかったです

先生がとても熱心に教えて下さった為、自分自身英語は苦手であったけれど楽しく受講することができた。

私はドイツ語を初めて受講したため、難しかったが楽しく学べた。

自分の英語能力の低さを痛感できた講義であり、英語に対する学習意欲が高まった。

授業はとても良かったが、自分がついていけず申し訳なかった。

終始とても楽しい雰囲気です授業を終えることができました。この授業を受講できてよかったです。"

教員が熱意を持って授業をしてくれるため、受ける側も真面目に取り組むことができた。

テストの成績だけではなく、授業での積極性やプレゼンテーションも含めた成績評価となっていたため、英語が苦手であっても努力しようと思えた。

英語のみの授業であったため、教員が何度も同じことを伝えてくれ、最初は理解できないことも理解できた。また、moodleにも書き込んでくれたため、授業で理解しきれなかったことも理解できた。

先生のテンションが高く、とても楽しい雰囲気だったので息抜きになりました。

先生と生徒の距離が遠いと感じた。

難しい言語であるにも関わらず、丁寧に教えて下さり理解の手助けになりました。

楽しく英語を学ぶことができた。

英語におけるリスニング力とスピーキング力の向上の手助けになりました。

楽しく英語を学ぶことができた。

基礎的な英文法の学びの手助けになりました。

自己紹介など身近なことを言えるようになった。

楽しく外国語に触れることができた。

英単語を覚えるだけでなく、PCといった差別をしない英単語など様々な知識を身に付けることができた。

授業を通して、様々な英語の言い回しを身に付けることができた。

とても良かったです

様々な活動があってよかった。

毎回の授業や復習を通して英語の力を高めることができた。学習計画シートや振り返りシートを先生が作ってくれていたので学習がしやすかった。また、授業では TOEIC の解き方の説明を分かりやすく行ってくれていたの身に付けることができた。

毎回の課題で自分で調べながらも英文が作れていい経験になった。質問や授業も英語でなされたけどこちらに伝わるよう工夫がされていてよかった。授業も楽しくていいものだった。

英語の文法や使い方など分かりやすく説明してくれた。細かいこともできるだけみ砕いてやってくれたので本当に理解しやすかった。テストの難易度も授業を理解していれば普通にできるものでよかった。授業自体も楽しかった。

先生の教え方が分かりやすく難易度もそれなりだったので初めて習う言語にしてはとてもやりやすかった。質問への回答も適切でよかった。テストの難易度も授業をしっかり復習していればできる程度でよかった。授業も楽しかった。

授業が楽しかったです。

たくさんお話することができて楽しかったです！

授業の内容も解説も非常にわかりにくかった。

咄嗟に英会話を出来るようになった

専門的な英単語があり難しかった。

英語と違い難しかった。

発音テストの際、なかなか出来なかったけど、マンツーマンで教えて下さり、とてもよかったです。ありがとうございました。

全て英語で話されて、理解が遅れることが多々あった。

中国語で全く知らないところから入ったのに基礎的知識が身についたので楽しかったです  
文章の構成を一つ一つ学ぶことが出来楽しかった

高校と違って、全ての会話が英語だったので聞き取ろうという意欲で学ぶことが出来た  
授業内での日本語の使われる頻度が少なく何を言っているのか理解できないことがよくあった

難しいと感じる内容もあったが、先生がかみ砕いて説明してくださり、難しくないことを強調してくださったことで前向きに勉強に取り組めた。楽しかった。

質問にも毎回応じてくださり、他の学生の加力学習のサポートをされているお姿も拝見したこともあり、熱心で素敵な先生に恵まれたと感じた。授業内容も、ただ英語をするのではなく、他文化や様々な国の歴史を学ぶという一貫したテーマがあり、分かりやすくて楽しい授業であった。

毎回、英会話のコツを先に教えていただいてから、準備、会話の順番で授業が進み、分かりやすくてスキルアップにつながる授業であった。また、実際に会話する機会をできるだけ多くとってくださり、楽しく英会話の力を伸ばすことができた。

楽しかった。

よく勉強できた。

言語の授業を通してその国への関心も同時に深まった。とても有意義な授業だった。

力になることが多く、学びになった

学びになった

興味が持てた

1学期にドイツ語 I を受講しました。英語とは異なる文法や単語に苦労した点もありましたが、先生が丁寧に教えてくださったおかげで、楽しく学ぶことができました。

ペアワークの機会が多く、英語でのコミュニケーションの練習ができたので良かったです。

ニュースを題材にして授業が進んでいくスタイルで、楽しく英語を学びました。ニュースの内容も興味深いものが多く、ためになったと感じます。

英会話を通じて他の学生と交流ができるいい機会となった。

予習をちゃんとすれば優しい授業でよかった。

新しい言語を学ぶのは新鮮で楽しかった。

半年間お世話になりました。

改めて英会話を学び直すことができたので良かったです。

多くの単語を知っていきたいと思った。

1週間に2回ある授業が対面の回と非同期の回に分けられていたため、対面授業の予習などに時間をしっかり取ることができてよかった。

英語での会話の機会が多く設けられており、実践的な授業を受けることができ、主に英語での会話術を学ぶことができた。

週に2回ある授業のうち、1回は非同期の形式で行われていたため、対面授業に向けて予習の時間を多くとることができてよかった。

テキストを用いた授業は高校で習う英文法の復習のような内容になっており、大学での英語学習と高校までの英語学習の違いをみつけることができなかった。

よかった

活動の内容が面白かった。

基礎から学べたので非常に良かった。

初めての言語だったが、丁寧な授業で非常に理解しやすかった。

日本語がほとんど出てこない授業スタイルだったので、一度置いていかれた時、またついていくのが難しかったです。

単語を覚えるのが大変でした。

教員の発言が二転三転していた。

第二外国語の授業は非常に楽しかった。異文化の学習も行えた。

大学英語入門を通して英語学習を週に1回必ず行う機会ができてよかった。

英会話を通して、英語学習を週に1回必ず行う機会ができてよかった。

英会話は、英語の分野の中で一番苦手意識を持っていたが、授業内で多くの人と英語を用いて話すことで打ち解けることができるなど、スピーキングを行うことによって楽しい時間を過ごすという初めての経験ができた。そのことによって自分の英語に対する苦手意識も少し軽減されたように感じる。

前期と後期でレベルが変わり、後期は少し難しく感じることもあったが、授業には毎回出席して意欲的に取り組むことができたように感じる。

主に長文の読み方をよく理解できた。

説明が理解しやすかった。後輩ができたなら是非お勧めしたい。

ありがとうございました。またお世話になります。

英語で会話することへの苦手意識が減りました。

知らなかったことを英語で学べて楽しかった。また、常用ではない少し難しいような単語も教科書内容によって知ることが出来たので良かった。

色々なひとと英会話を通して関わった点は良かった。

第二外国語を学ぶのはすごく難しいことがわかった。既存の知識と混ざって分からなくなることが多々あったので、もっと家庭学習をすべきだった

### 3. FD 活動

副分科会長 齋藤昌人

今年度も、FD 関連のイベントを行うことはできなかったが、2024 年度以降の共通教育再編に向け、共通教育における外国語教育の在り方について関係者間で議論し検討した。とりわけ問題とされたのは、語学担当教員の激減という状況のもとでの授業の質の維持、あるいは授業担当者の負担と授業の質のバランスにどのように折り合いをつけるかという点である。この点については、根本的な解決策というわけではないが、オンライン教材を用いた自律的学習の導入等がひとつの方向性として検討された。

## 9 キャリア形成支援科目分野分科会

キャリア形成支援科目分科会長 齊藤 雅洋（地域協働学部）

### 1. キャリア形成支援分野の教育目標

学生のキャリア形成支援に必要なプログラムを開発・提供する。

### 2. 分科会活動の報告

#### (1) カリキュラム編成

10月下旬～12月にかけて、教職委員会、資格教育委員会、SUIJI推進室等と分担し、次年度のキャリア形成支援分野のカリキュラム編成を実施した。そして、授業担当教員に対する次年度開講の形態や時限・曜日等の確認作業の依頼や、新規科目の取りまとめを行った。また、共通教育における非常勤講師による科目は語学以外を削減するという方針に基づき、キャリア形成支援分野の該当科目の非常勤講師へ開講終了の予告を行った。

#### (2) 自己点検・評価活動

2月下旬から3月にかけて、副分科会長（自己点検・自己評価部会）とキャリア形成支援分野の授業科目のシラバスの点検を行った。「シラバスチェック項目」にそって点検を行い、修正が必要な箇所にはコメントを付し、修正箇所一覧を自己点検・自己評価部会長へ報告した。

#### (3) FD活動

キャリア形成支援科目分科会単独でのFDは行わず、必要に応じて関連する他分科会等のFDに参加することを基本方針とした。本年度のFDへの参加実績はなかった。

#### (4) その他

特になし

## 10 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長

大塚 薫 (グローバル教育支援センター)

日本語・日本事情分科副会長 (FD活動担当)

林 翠芳 (グローバル教育支援センター)

日本語・日本事情分科副会長 (自己点検・自己評価活動担当)

渡辺 裕美 (人文社会科学部)

### <活動の概要>

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」が開講されている。

ここ数年、「日本事情」科目に比べ、「日本語」科目の受講者数が少なく、受講者数の偏りが見られた。今年度も新型コロナウイルス禍により特別聴講学生(短期交換留学生)の受入れが再開したもののコロナ禍以前の水準には戻らないこともあり受講者数が軒並み減少したが、その傾向が継続している。受講生からは「日本語」科目の授業が週2回の授業で2単位が取得できるのに対し、「日本事情」は週1回の授業で2単位の取得が可能のため、単位取得に際し、日本語科目の単位取得に多くの時間を割かなければならないことが指摘され、それが「日本語」科目が受講生に敬遠される一つの要因になっているようだ。

現在、共通教育の開講科目として、日本語Ⅰ～Ⅲは演習、日本事情Ⅰ～Ⅳは講義とそれぞれ設定されており、そのためか、日本語Ⅰ～Ⅲは週2回×16週で2単位、一方、日本事情Ⅰ～Ⅳは週1回×16週で2単位として設定されている。教授内容に違いがあるものの、単位数に響くほどのものではなく、単位数の認定が受講者数のアンバランスに影響しているのではないかと考えられる。

また、従来日本語・日本事情科目は「外国人留学生及び学則第40条第2項(外国において相当の期間中等教育を受けた者)に該当する学生のための科目」として定められ、正規生のための科目として開講されていた。ここ数年は、特別聴講学生(短期交換留学生)の受講が増加し、2020年度からのコロナ禍においては事情が異なったが、2010年度以降は日本語科目においては非正規生の受講が受講生の8割以上を占めている場合もあった。特別聴講学生は、母国で日本語・日本文化を専門として勉強している学生であり、高度な日本語力を有している。

日本語科目において履修学生に求められている日本語力は、日本語能力試験N1レベル(上級レベル)相当の能力であり、他の外国語で定めている基準より高く設定されている。実際に、履修している外国人留学生は、正規生及び特別聴講学生ともに本学で専門科目を日本人学生とともに学習している学生であり、上級レベルの日本語力を有しているため、日本現地で学習するという環境に加え、週1回の授業でも十分な学習効果が期待できる。さらに、週2回の受講の縛りをなくすことにより、外国人留学生の授業の選択の自由度が増え、より多くの教員の授業を受講することが可能になると考えられる。

以上の問題点を踏まえ、外国人留学生が週1回でも日本語科目が取れるようになること



は検討すべき今後の課題である。

### 1. カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文社会科学部の教員は日本事情科目を、グローバル教育支援センターの教員は日本語科目を担当した。科目構成は、日本語科目については日本語教育専門のグローバル教育支援センターの専任教員 1 名が 2019 年度末で退官しその後補充がなかったため、2019 年度当初から 1 科目減少し日本語 I ～Ⅲ、日本事情科目については日本事情 I ～Ⅳを実施した。

また、2022 年度の開講基本コマ数、担当体制については、面談やメール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

### 2. 自己点検・自己評価活動&FD 活動

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケート調査を全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めている。

2022 年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検活動及び FD 活動を連動させた活動を行ってきている。具体的な活動としては、日本語Ⅲの授業内で学生によるレビュー活動を実施するとともに日本語 I 及び日本語Ⅲでは、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。また、日本事情Ⅳでは大学教育創造センターが実施している FD プログラムの授業改善支援プログラムを実施し中間期及び終了時に授業アンケートを実施した。しかし、日本語・日本事情科目は全 7 科目を 5 名の教員で担当して行っている上、今回のレビュー活動並びに独自の授業アンケート調査を実施した科目は限られ、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。また、オンライン授業やアクティブラーニングに関する FD 研修を個人ベースで受講し、授業のさらなる改善に努めた。

その他、自己点検・自己評価活動として 2023 年度の日本語・日本事情科目を担当する教員のシラバスを確認し、教育の内部質保証として学生にとってより分かりやすい内容のシラバスになるよう修正を行った。

### 3. その他

新たな授業の開発としては、日本語・日本事情分科会で開講している科目内で今般の新型コロナウイルス禍における最新の日本文化の理解や文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育も展開した。また、日本語Ⅲの授業内で交流授業として受講生に加え学内の日本人学生と協定校の学生と小グループに分かれてピア・ラーニング活動を行うなど新たな授業方法の開発にも努めた。

2023 年度以降も購入した書籍の内容を踏まえて、留学生の体験型学習や日本における就

職時に必要なビジネス日本語教育、対面教育とオンライン教育を並行して実施するハイブリッド型教育を日本語・日本事情科目内で取り入れ、留学生のニーズに応えていきたいと考えている。